LAPとは

東京大学は、2004 年に海外拠点を南京大学に設置しました。2005 年には EALAI（EAST Asia Liberal Arts Initiative）が始まり、東大と南京大の交流は飛躍的に発展します。東大は、1999 年から北京大学、ソウル大学、ベトナム国家大学ハノイ校と、東アジア四大学フォーラム（BESETOHA）を開催し、EALAI はその実施機関にあたります。そして、リベラルアーツの重点展開として、南京大学での集中講義が始まりました。能楽のワークショップや歌舞伎の講演会を開催し、教育コンテンツとして『教養学導読』や『表象文化論叢』を中国語で出版しています。

LAP（リベラルアーツ・プログラム（Liberal Arts Program））は、2009 年 4 月、EALAI から独立したプログラムとしてスタートしました。南京大学との集中講義を重視しつつ、海外との交流モデルの構築、文理融合の新分野の集中講義の開講や学生派遣による体験型学習、新技術を導入した E-lecture など、より積極的な交流活動を行っています。 2010 年からは、教養学部の教養教育高度化機構との連携プログラムとなり、東京大学の教養学部の利点を十分に発揮できる体制を整えています。

LAP は、外部資金の提供を受けて実施される東京大学教養学部の寄付プログラムです。プログラムの開始にあたり、上海で活躍されている東大卒業生の雪暁通氏からご寄付をいただいております。

■ プレ講演（12 月・1 月）

本講演は、南京大学で行われる南京大学集中講義のプレイベントです。テレビ会議システムを用いて南京大学へ中継し、東京大と南京大で同時に開催致します。3 月の集中講義テーマの中から、核となる文理の講義を選んでそれぞれを論じ、それを東京大と南京大の学生の皆さんに共に考え、議論してもらいたいと考えています。

講演に参加し、レポートを提出した東大学生の中から、3 月の集中講義への派遣者を選抜します。東大学生であれば文系、理系、学部生、大学院生を問わず参加可能で、多様な層の学生を派遣することで、東大学生の中での交流も深めたいと考えています。

■ 南京大学集中講義（3 月）

3 月の 1 ヶ月間、南京大学へ東大教員を派遣して集中講義を行います。日本人にも中国人にも身近なテーマについて、文理融合の最先端の研究成果を用いて論じることで、問題を如何に発見し、如何に思考するのかを、学生の皆さんに伝えていきます。講義には両大学の学生が参加し、議論を行います。

■ テーマ講義（E-lecture、10 月～1 月）

プレ講演、集中講義と同じテーマについて、東京大学でリレー講義を行います。南京大学集中講義での成果を反映させ、これまでの東大での講義を刷新し、刺激的な講義を行うことを目指します。講義はテレビ会議システムを通じて南京大学へも中継します。テーマ講義での成果は、次の年の南京集中講義に反映させていきます。

■ 学生交流

東大から南京大へ　南京集中講義の期間中、東京大学と南京大学の学生が、共に同じ講義を受講し、受講後にそれをテーマに討論を行います。東大から南京へ派遣された学生、学部の 1 年生から大学院生まで、文系・理系を問わない混成グループです。身近なテーマをめぐる討論は、日中間の異文化体験から専門や学年を越えた交流へ進み、様々な自己発見をもたらします。

南京大から東大へ　南京大学の学生を東京大学へ迎え、教養学部の議論と学生生活を、そっくり体験する短期プログラムを実施します。教養学部の「日常」を開放し、参加学生による研究発表や討論を行う。日常体験型の交流を目指しています。

目次

LAPとは **1**

南京大学集中講義学生交流 **3**

東京大学学生による感想・意見 4

南京リベラルアーツ・プログラムについて 4

意見・要望 5

南京プログラム レポート 8

南京プログラム学生派遣活動全般についての感想、意見及び報告 9

2010 年度南京大学「身体論」集中講義プログラムを通じて 12

南京プログラム学生派遣レポート 14

南京大学集中講義報告書 17

南京集中講義 2010 春 レポート 18

南京プログラム学生派遣に参加して 19

東京大学学生による座談会記録 21

東京大学一週間体験プログラム **28**

南京大学学生による感想 29

感想文 29

感想文 30

東京一週の感想 32

LAP一週間東京滞在から考えたこと 33

私の感想 33

感想文 34

東京大学一週間体験プログラムについての感想 35

南京大学学生によるレポート 37

日本と中国はどう付き合っていくか?――隣人を愛し、ともに平和に生きる 37

大学で学ぶとはどういうことかについて 39

大学で学ぶとはどういうことか 40

日本と中国はどう付き合っていくか 41

大学で学ぶとはどういうこと 43

大学で学ぶとはどういうことかについて 44

大学の社会職能から大学のすべきことを見る 46

東京大学ボランティア学生による座談会記録 48

リベラルアーツ沿革 **59**

南京大学集中講義学生交流

2010 年 2 月 28 日～3 月 7 日／3 月 17 日～3 月 25 日

■ 概要

本プログラムは、2009 年度南京大学集中講義「身体論」に合わせ、2009 年 12 月に東京大学において行われたプレ講演に対するレポートをもとに選抜した学生を南京大学に派遣し、南京大学の学生とともに集中講義に参加させ、南京大学の日本語科学生との交流を図るものであった。派遣期間は 2010 年 2 月 28 日～3 月 7 日（2 人）と、3 月 17 日～3 月 25 日（7 人）の 2 回に分け、それぞれ國吉康夫先生による「ロボットにおける身体性と認知・行動の関係」（3 月 1 日～2 日）・廣瀬通孝先生による「コンピュータと VR」（3 月 4 日～5 日）、福島智先生による「盲ろう者の視点で考える障害学と身体」（3 月 18 日～19 日）・清水晶子先生による「〈わたしの〉身体と自己決定――トランスセクシュアル、インターセックスの身体から照射する」（3 月 23 日～24 日）に参加した。派遣終了後には各自レポート提出を課した。

■ 日程

第一グループ		
2月28日（日）		成田→南京
3月1日（月）	午前	9時～12時　國吉先生第一講
	午後	14時～日本語科学生との議論
2日（火）	午前	9時～12時　國吉先生第二講
	午後	14時～日本語科学生との議論
3日（水）		見学
4日（木）	午前	9時～12時　廣瀬先生第一講
	午後	14時～日本語科学生との議論
5日（金）	午前	9時～12時　廣瀬先生第二講
	午後	14時～日本語科学生との議論
6日（土）		
7日（日）		南京→成田

第二グループ		
17日（水）	午前	成田→北京
	午後	北京→南京・福島先生上映会
18日（木）	午前	9時～12時　福島先生第一講
	午後	14時～日本語科学生との議論／夜～講演
19日（金）	午前	9時～12時　福島先生第二講
	午後	14時～日本語科学生との議論
20日（土）		見学
21日（日）		
22日（月）	午後	清水先生前夜祭
23日（火）	午前	9時～12時　清水先生第一講
	午後	14時～日本語科学生との議論
24日（水）	午前	9時～12時　清水先生第二講
	午後	14時～日本語科学生との議論
25日（木）	午前	南京→成田

■ 南京での活動

午前　授業 8 時～12 時

午後　14 時より授業内容について南京大学日本語科の学生と議論（1 時間程度）

見学　第一回：3 月 3 日
第二回：3 月 20 日

■ レポートの提出

テーマ　活動全般についての感想、意見及び報告

東京大学学生による感想・意見

南京リベラルアーツ・プログラムについて

理科Ⅰ類 1年 （第一グループ）

今回行われた南京大学との交流プロジェクトは、自分のこれまでの常識を揺るがすとても貴重な機会になった。

自分と外部の境界は揺ぎ無いものだと考えていた。しかし、このプログラムを通してその境界をある意味で撹乱することが出来た。

例えば、「機械が人間に近づいている」ということは、ニュースで報道される人間型ロボットから認識していた。ただ、廣瀬先生の講義において、人間がメガネをかけるなどごく日常的になった行為を「人間が機械を取り込んでいる」と解釈することも可能だと知った。そういった考え方をすれば、埋込式の人工内耳など人と機械が一体化するようなロボットも「メガネをかけるようなものだから」という形で社会に納得させることが出来るかもしれない。ただ、その時の違和感から、人間と機械の間には自分の中ではまだ壁があるのかもしれない、と思わせられた。この違和感を克服することについてはまだためらいがあり、ロボットに関する倫理が成熟するまで待つことも必要ではないだろうか。

△ 中山陵にて國吉先生と

講義も素晴らしかったが、南京大学の学生との交流、南京を見たことは、日本と中国の違いを見つめ直すいい機会となった。

中国は近年、急速に経済発展している。その知識はあっても、いざ本当の中国を見てみるとその近代化した街並みやあちこちに見られる大きな建設現場には驚かされた。南京の中で発展している部分は、日本の街と変わらないだろうと思われた。それでも、キャラクターの絵的センスなど、「中国らしい」と思える部分が随所に見つかった。

南京大学では日本語科の中国人か、そうでなくとも日本語を会話が出来る程度に習っている中国人と主に交流した。日本語の上手い人なら、特に口下手な日本人と比べればどちらが日本語が上手いのかは分からない。外見的には日本人と似ている中国人が日本語に近い言葉を話している、ということは非常に自分にとってややこしかった。ややこしかったが、言葉を交わしている時に言語能力の差ではなく考え方で「いかにも中国人だな」と思わせられる点はあった。それでも、やはり違和感を受け入れてみればより深く交流ができると感じた。

異なる2つの物があり、それが似通っていく時にこそ相違点は見つかりやすい。その時に覚える違和感を、ある時は克服し、ある時は受け入れていく。今回のプログラムはどのような体験にも根本的には相違点を見つけ、考えていくという基本的な行動がいかに重要であるかしることの出来る、とても意義深いものであった。

意見・要望

文科Ⅰ類 1 年 （第一グループ）

1. 勿論 1 週間という予定のせいでもあると思うのだが、日程が厳しい。特に、南京側の学生の負担が大きいようであった。新学期の開始時期とこのプロジェクトが重なってしまったせいもあると思われる。彼らは毎日レポートに追われているようであった。学部 4 年生との交流を増やし、負担を分散させる必要があったのではなかろうか。

2. 南京の学生との交流が院生 1 年生に限られてしまっていた。学部 4 年生や、あるいは他の学年との交流もしたかった。ただし、1、2、3 年生は仙林キャンパス（鼓楼キャンパスとは車で 30 分ほど離れている）に住んでいて、宿泊場所とは離れていたし、院生 2 年生以上は更に忙しいであろうので、やむを得ない部分もあった。授業が始まる前の時間にも交流しようと思えばできるので、そういう時間を逃さないことが重要であると思う。

3. 授業についての議論という形で、あまり形式張った予定の組み方をするよりは、学生側に任せ、より flexible な議論を期待したほうがいいと思われる。枠にはめられた議論ほどおもしろくないものはないし、実際全く盛り上がらず、最終的には単なる雑談になってしまった。しかし、その雑談は非常に面白かった。中国の学生が何を感じ、どのような生活をしているのかなど興味深いことがいろいろ聞けた。また、議論のやり方についても、東大教授による講演の内容に関係した学部の中国人学生を招き、彼らと東大生、さらに通訳として、日本語科の学生も交えた形のほうがより活発な議論が望めるかもしれない。

4. 授業そのものについては、南京側の学生にとってはやはり難度が高いようだった。学生が通訳を兼ねていて、彼女らは非常に優秀であり、かつ、刺激的でもあったが、しかし、学生通訳という形であるからこそ、授業の進度は遅くなりがちで、眠気を誘うという意見もあった。

5. 廣瀬先生は、通訳と先生の距離を近づけて、つまり隣同士で座り、interactive な形で、また、逐次通訳という形でやるのが一番いいとおっしゃっていた。しかし、逐次だと授業のテンポはどうしても遅くなりがちである。日本人学生である私としては、もう少し速く進めてもらうとありがたかったが、しかし、ゆっくりなのでわかりやすいという利点もあった。

6. 授業そのものは朝から昼にかけてであったが、南京の授業は通常夜（6 時頃から）行われることが多く、また、朝から昼だと他の授業と重なることがあり、南京側の学生にとっては、その門戸が若干狭められてしまうということもあったらしい。特に、國吉先生や廣瀬先生の授業は理系向けで、受けたい学生が多くいたのに、出られなかったという声も聞いた。

7. 授業で使われる専門用語が非常にわかりにくいという話があった。英語で説明されても、日本語科の学生は英語に不得手で、よりわかりにくくなるといったこともあったらしい。できれば、専門用語に関しては、あらかじめ、中国語にかえてきてもらうとありがたいとのことであった。

8. 酒を飲みかわし、カラオケをするといった、肩の力を抜いた交流も非常に大切であった。そういったものを経てこそ、固い話題、政治の話題などが出来るということもあった。

9. 向こうの学生にとって、日本に留学することは非常に困難で、かつ、非常にお金を要することであるからして、このプロジェクトで向こうの学生をこちら、つまり東京大学に呼ぶということは非常に意義深いものであるようだった。アメリカのジョンホプキンズ大学はすでに、10 階建ての交流センターを 3 つ建設し、准教授以上、あるいは学生を 100 人単位で南京大学に派遣しているとのことであった。東京大学はどうなのであろうか。学校側としては厳しいのであれば、学生レベルでの交流を興していけばいいのではないかとも思う。京論壇、HCAP あたりと連携して取り組んでいきたいと思っている。

10. 中国語ができる東大学生の存在はやはり必要不可欠であったし、やはり中国へ行くからには、中国に

△ 廣瀬先生の授業の様子

ついてのある程度の知識、ある程度の中国語を身につけておいたほうが、交流はより実りのあるものになるように思われた。しかし、中国語ができないことのもどかしさを肌で感じることが最も重要であるかもしれない。中国で日本語科の学生と、日本語で交流するというのはやはり相当面白い体験であった。そもそも、母語たる日本語で中国人と交流するとこちらは感情を吐露しやすいし、嘘はつけない。京論壇は英語での交流であり、本当は、中国語、英語、日本語すべてを動員したコミュニケーションというのが一番望ましいのかもしれない。

11. 東大、南京大双方の、学生プロフィール、何を専攻し、何に興味があるのか、写真付きでまとめた表のようなものがあると交流がよりはかどるであろう。

12. 南京の博物館(何の博物館かはわからない)の館長が南京大学の歴史学科の先生であるらしいので、働きかけをすれば、博物館とも何かできるのではないだろうか。

13. 授業後に質問時間をなるべくもうけてほしいという意見があった。

14. 学生同士の交流に際しては、日本人 3、中国人 3 ぐらいが望ましい単位ではないだろうか。中国人が 3 人いると、わからない日本語表現を互いに補いあうことが出来るし、話題につまることも防げる。

中国人学生が既に日本人学生と変わらない。共産主義を信じているものはいないし、共産党に入っていても、それは出世のためだと言い切ってしまう渇いた感性がすでにいきわたっていた。将来公務員になろうとしている学生も、マルクスレーニンについての授業ほどつまらないものはないと言ってしまうのだ。日本のドラマを見、日本の映画を見、日本の雑誌を読み、日本の音楽を聞く。彼らは我々と何等変わらない 20 代の若者であった。逆に、日本のマスメディアがいかに偏った報道をしていたか、いかに我々日本人が洗脳されていたかが身にしみてわかった。抗日、反日の気風は既に薄まり、大学内では、反日の学生を見つけることそもそもそれ自体が難しいと言う。これは考えてみれば恐ろしいことで、なぜここまで同質化が容易に進むのか考えるべき問題でもある。資本主義の脅威を改めて感じずにはいられない。ただし、勿論違う部分もあって、その gap が最も面白いし、我々日本人とは何なのかを考えさせる契機ともなるのだ。特に恋愛観は大きく異なっており、中国では初恋が非常に重視されており、初恋が破れてしまった女性は、しばらく恋ができなくなるほど大きなショックを受けるらしい。初恋を忘れるためにはどうすればいいか、相談もされたし、逆に、日本人としては、どうしてそんなに長く恋を続けられるのか相談をせざるを得なかった。何しろ、初恋の人と結婚するという学生が、10 人の中に 3 人もいるのだ。しかし、この文化もいずれは滅びゆく運命にあるのだろうか。少なくとも今は高校までは恋愛が禁止されているとのことであった。勿論、そんなルールを守らない、情熱的な若者もいるにはいるのだが、ごく少数であり、特に、親に厳しく言われているらしい。これは儒教が今も強く生きていることを表しているのだろうか。現代の中国においては、民族教育は既に、チベット、ウイグルなどで火を噴く暴動からも明らかなように、その限界性が強く認識されており、ここ数年、中華文明の一体性を強調するほうへ大きく舵が取られているらしい。その延長に、反日気風の沈静化があり、孔子などの中国古典文化の再興があるらしい。

また、日本語そのものについても再考の契機が与えられた。日本語を母語としない相手に対し、どう自分の思いを伝えるか。この際、日本語がいかに省略の多い言語か（特に主語）、また口語文法がいかに文語文法とかけ離れたものか強く認識せざるを得なかった。言語に興味のある学生ならばより多くのことに気付くかもしれない。また、向こうの学生にも日本語について多く教えてもらい、母語の外国語としての新しい一面を見て、それは非常に

興味深かった。中国人にとっての川端康成の日本語、「そこ」と「あそこ」のニュアンスの違い、そもそも日本語には主語はあるのかどうかということ、和歌の五七五というリズムなどなど非常に面白い話ができた。

そもそも向こうの学生は非常に勉強熱心で（何しろ石田梅岩まで読んでいる学生がいる）、また政治のことをよく考えており、非常に刺激的だった。中国という存在は、今の沈滞した日本にとっての起爆剤になりうるものであろうことが強く感じられた。政治問題に関する壁は、乗り越え難くそびえ立つものではすでにないであろうこと、また、ビルが建ち並び、瞬間瞬間に発展を続ける街の現状、そういったものが、アジア共同体への誘惑を強く誘うのであった。そもそも、政治問題に関しては話し合わなくては始まらない。日本がただ単なる支配者であって、なんていう単線的な問題ではないように感じた。対日協力者がいて、かつまた、日本に憧れる若者がいて、事態は複雑に織り合わされた編み目模様のように眼前を覆う。とにかく話すこと、それが大事ではなかろうか。今回、チベット問題、台湾について、南京大虐殺について、餃子問題について話したが、私は、文科Ⅰ類の学生でありながら、いかに中国のことを知らずに今までやってきたかそれが痛烈に意識された。私は魯迅を読んだこともないし、1949年以前、チベットでは農奴制が敷かれており、中華人民共和国成立とともに奴隷が解放されたこと（真実かはわからないが）、それも全く知らなかったのだ。中国が崩れれば、日本も崩れる。そんな当たり前のことすら意識していなかった自分を強く恥じた。ここまでいろいろ感じさせてくれたこのプロジェクトには本当に感謝しています。ありがとうございました。先生方のなみなみならぬ努力があり、これが実現したということ、そしてそれに参加できたこと、それは本当に良かったです。

△ 教室にて中国人学生と

また、社会問題についても意見をかわしたが、中国社会では、ネットゲームへの没頭についても、リストカットについても、もはや問題が顕在化しており、消費社会の爛熟が既にあらわれつつあるのかもしれない。

最後に授業について触れてしめくくりたいと思う。授業では、最先端の science に触れたわけだが、そこでは既に人間の主観をいうものが扱われる対象になってきていることを感じた。人間がいかにして感情をもち、どのように感じるのか。國吉先生は、身体を起点にした認知観でそれに挑もうとしていたし、廣瀬先生は VR において、Real というものを構築するに際して、人間がいかに感じるのか、それを俎上に上げ、VR をより Real にすることについて話していた。ここでも交流の重要性が浮かび上がってくるのである。この問題が文系と理系が協同して取り組むべき問題であるのは明白だ。人間の感情とは何かを考えた時、それは他者とのかかわり合いの中で生み出されるという考え方が一方にある。これが、國吉先生の立場と近い、環境主義的な認知観であるが、こうしたものと中国人学生との交流がリンクしてくるのである。いかにして交流の中で相手の感情を引き出すか。それは何気ないドラマの話題、映画の話題、恋の話題、そしてどんどん深化していって、政治問題など、より深い感情の問題へとつながっていくのだ。こうした交流をうまくするにはどうすればいいのか、相手の目を見、相手にどのように言葉を伝えるかを考え、そしてユーモアをいかに交えるか、また場を読むことも大事であろう。こうしたことも、科学は既に扱おうとしているのだ。また、一方で、人間と人間のやりとりの中で、相手の感情がどれだけ汲み取れるかという問題もある。そもそも本当の感情とは何か、それは存在するのか、教育というものがどれだけ人間の感情に影響を及ぼすのか。とにかく、この交流で感じさせられたことは限りなく広がっていくのである。これを踏み台にして、更に前へ進んでいきたいとつとに思うのである。

南京プログラム レポート

理科Ⅰ類 1年 （第二グループ）

■ 感想

今回の南京プログラムに参加できたことは私にとって非常に貴重な体験となりました。まずは、自分にとって初めての海外旅行であったという事、そして中でも中国に行けたという事、南京大学の学生と交流を持てたという事など、たくさんの事柄を含んだ形で今後の私に大きな影響を与える事になるであろう経験となりました。

今回、私は初めて海外に行ったわけですが、何よりも新鮮だったのは私自身が“外国人”になるという事でした。今では、テレビをつけたり、インターネットを繋げれば何時でも外国人は見る事が出来るし、私の狭い生活圏でも時折外国人を目にする機会は増えてきました。それでも、そういう人たちと接する時、やはり彼らが外国人であり私は現地の人間と言う関係でした。“外国語”を母語とする人たちの中に身を置き、その中で“外国人”として生活するという体験はとてもとても面白いものでした。

今のご時世、あまり“外国”というのを強調するのはあまり良くないとは思うのですが、昔の人が外国人に強い抵抗感を感じていた気持ちも少しだけ分かった気がします。何より辛かったのはやはり言葉の壁でした。今回の渡航先が中国だったので、容姿、風貌はあまり日本と変わらなかったので少しホッとしましたが、周りの人が知らない言葉でやり取りをしており、自分だけ話についていけないと委縮してしまいました。8.8 元の甘栗を買って、10 元渡したはずなのに 1 元しか返ってきませんでした……（でも甘栗はすごくおいしかったです）。

それとは逆に、日本か中国ではなくどこでも同じなのかと感じる場面もありました。驚いたのは、今回南京にご一緒したKkさん、Kyさんが中国語は全くできないはずなのに何故か中国の方とコミュニケーション出来ていた事でした。何故かと聞いてみたら、大体は話の流れで分かるという事だそうで、あとは飲み会で意味の不明瞭なやり取りに慣れている、との事だそうです。それでも、スーパーでお茶を買っていたときに店員さんの話を聞いて「新茶が入ったらしいよ」と言ったときは超能力かと思いました。

△ 夕食の様子

あまり南京プログラムに関係のない感想はこのくらいにしまして、講義や交流の方に話を移しますと、福島先生、清水先生の講義は共にとても面白く、障害学、クイアは（全く褒められた事ではありませんが）初めて聞く話題だったのでとても勉強になりました。

ただ、個人的にパネルディスカッションというのが凄く好きで、福島先生と清水先生の対談などがあったらなあと思っていました。

授業中の少人数でのディスカッションの時間は足らなかったように思います。中国語で話してそれを時折日本語に訳してもらったりした事もあり、十分な議論が出来なかった気がします。

授業後のディスカッションについてですが、私の感じたところでは南京大学の学生さんたちの議論への積極性が若干低かったように思います。私の思い違いならば良いのですが、そうでなかった場合その原因が何なのか、例えばそもそもディスカッションが好きではない、または慣れていない、それとも疲れていた、講義の内容が分からなかった、実は怒っていた、それとも他に理由があったのかは分からなかったので、南京の学生から率直な意見を聞いてみたいです。ひとつ聞いた所では、食事の席ではあまり勉強の話など堅い話はしたくないと言っていた学生さんもいらっしゃいました。それとは別に、日本の学生

と中国の学生が議論をすると、「日本は～」「中国は～」という話になってしまうようで、講義の内容を中心に深い議論がなかなか展開できなかったようです。学生同士のディスカッションはまだまだ課題があるかもしれません。

あと当り前ですが、南京の日本語学科の方は全員文系だったのでもっと理系な方ともお話ししてみたかったです。

それとは逆に、今回ご一緒させて頂いた東大の学生の方々は凄く、議論好きでとても楽しかったです。

あまり文系理系という分け方をしない方がいいのかもしれませんが、それでも今回ご一緒させて頂いた同じ東大の方々とは、この南京プログラムを通してでしか交流を持てなかっただろうと思います。本音を言いますと、今回の南京プログラムで一番驚いたのは東大生だったりします。この南京プログラムで、学部生や院生が学年も分野も問わずに交流を持てるというのはそれだけで素晴らしいものだと思います。もっぱら聞く側に回ってしまった、回らざるを得なかった事は少し悔やまれますが、それでも院生の方が熱い議論を戦わせているとつい夢中になって聞いてしまいました。持ち帰ったビールを飲みつつ、深夜の 2 時までホテルの部屋で議論をしていた日もありました。またホテルが 2 人で 1 部屋と言うのも私としては良かったと思います。同じ部屋だった Kk さんには色々な話を聞かせて頂きましたし、質問もさせてもらい、凄く貴重な経験となりました。もし、一人ひとりが個室であったなら 8 日間ではまだまだ東大の学生間でも距離があったかもしれません。

ですが、望めば個室にしてもらえる仕組みはあった方がよいと思います。

■ 意見と報告

今回が最初の学生派遣とは全く思えないほど至れり尽くせりで、満足を通り越して申し訳ない気すらしました。ですが、何点か気付いた点もありますので、書いておきます。

・ まず、活動費 45000 円は多すぎました。結局、初日に北京空港で 20000 円を換金したっきりで 8 日間過ごしてしまいました。その 20000 円分も余ったくらいです。納税者に怒られそうです。

・ 食事代を南京の学生が知らない間に払ってしまっている事が多いです、こちらで払おうとするのですが、南京の学生さんたちは凄く手ごわいです。さっきの 20000 円で済んでしまったのはこのせいでもあります。

・ 南京の学生さんたちが最後の方は凄く疲れていました。朝迎えに来て頂いたり、食事のセッティングして頂いたりなど負担が結構大きかったように思います。嫌々やっていたかどうかは分かりませんが、疲れてはいました。

・ 南京の方を東大にお呼びしたい。

今回の南京プログラムに参加して良かったと心から思っています。このプログラムがこれからも続いていき、また南京の学生が日本に来られるようになる事を願っています。その時には、そのためには、私も全力で働くつもりです。何かお手伝いできることがありましたら、是非連絡してください。有難うございました。

南京プログラム学生派遣活動全般についての感想、意見及び報告

文科Ⅱ類 1 年 （第二グループ）

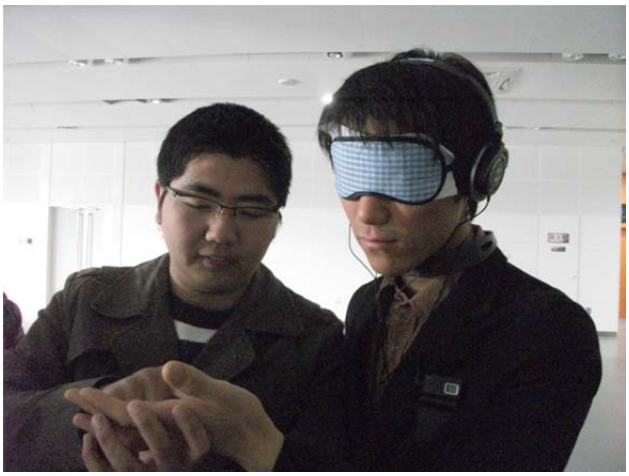
3 月 17 日から 25 日までを振り返りながら活動についての感想や意見を述べたいと思う。

3 月 17 日　　朝 5 時 22 分の電車に乗り成田空港へ。到着はぎりぎり。もう少し遅い飛行機ならばゆとりが持てたと思うのだが、S さんいわく飛行機の本数が少ないそうなので贅沢は言えない。残りの 6 人も時間通りに到着。Ky さんとは友人の友人ということで、前もって話は伺っておりすぐに打ち解けた。その後空港で少し自由時間があったため Ky さんと H 君と私の 3 人で朝食をとり、飛行機に搭乗。飛行機の中では H 君が隣に座り、学年が同じためか話しやすく、つまらない世間話をした。昼過ぎに北京空港到着。ファンタ（ジュース）を 3 元に満たない

金額で買い、物価が 3 分の 1 以下であることに改めて驚く。活動費が 1 日 5000 円（計 45000 円）出たが、物価を考慮すると多すぎると思う。実際使った金額は、お土産代を含めても1100 元（約 16500 円）程度。内半額足らずがお土産代。もちろんお土産代は本来自分で払うべき。次回からは活動費は半額以下でも十分すぎると思う。北京空港で福島先生や奥さんと通訳の方、刈間先生、石井さんと合流。南京へ。南京到着後ホテルに荷物を置いたらすぐに福島先生の前夜祭へ。前夜祭で見た DVD のうち 1 つは以前見たことがあったため、聞き取りやすかったが、南京大学の学生にとっては聞き取りづらかったようだ。前夜祭終了後石井さんと南京大学の方 2 人と日本人学生で夕食。あちらの大学では夕食を 5、6 時ごろまでに済ますのが普通らしく、前夜祭の後に夕食をとるとほとんどの南京大学の学生が夕食を終えており、一緒に食事をとれないのが残念だった。

3 月 18 日　　7 時から朝食。朝早いため朝食の品数が少ない。朝食後ホテルに王さんと趙さんが迎えに来てくれ、バスへ。45 分ほどで到着。授業。障害学について。福島先生ご自身の体験に基づいて行われる授業。今まで受けたことのない授業で面白い。コミュニケーションの重要性をこれほど実感したことはなかった。生きていくうえで非常に価値のある授業だったと思う。授業後昼食。食堂の別室で。食後再びもう一方のキャンパスに戻って討論。まずは南京大学の学生のために授業の要約と解説。その後、日本と中国の障害者に対する制度の目的の違い（日本が障害者を社会の一員として取り込もうとしているのに対し、中国では健常者と分断し特別な教育を施す）を指摘。中国が障害者に対してどのような対応をしているのか南京大学の学生に聞く。議論白熱。結果障害者自身が健常者と同じように生活するか、同じ障害を持つ人々と特別な教育を受け彼ら、彼女らのコミュニティーのなかで生きていくか選べるのが最も良いのではないかという結論に。授業に関する討論が終わった後は日中の大学院生の地位について討論。Kk さんと W さんの院生卑下がすごい。南京大学では学部卒業後就職する場合は通訳など、院を出ると大抵の人が先生になるらしい。討論後大学の食堂で早い夕食。日本人学生は皆、さりげなくおごられてしまった。夕食後は劇を観に。開演を待っていると、後ろの席から日本語が聞こえてきたため後ろの席の人たち（4 人）に日本人か尋ねたところ京都大学からの留学生だそうだ。彼女たちは明日暇らしいので、福島先生の授業を勧めようと思ったが、キャンパスが違うことを思い出してやめた。劇は字幕（中国語）つきだったためある程度話はわかった。劇終了後疲れている人は帰り、余力のある人（南大生 2 人、東大生 5 人）は飲みに行った。11 時に帰宅。

3 月 19 日　　7 時から朝食。皆、キャンパス移動がなければ、と嘆く。朝早く起きるのはさほどつらくないが、朝早いと朝食のメニューが少なくて飽きる。贅沢な悩みだ。朝食後昨日同様迎えを待つ。バスは昨日と同じ場所に来るのだから、もう迎えは必要ないと断ればよかった。毎朝迎えに来てくれる王さんと趙さんに疲れがみえた。次回からは、出来る限り南大生の負担を減らすよう東大生側から働きかけなくてはならないと痛感する。授業は盲ろう体験が中心。手のひらに字を書いてコミュニケーションしたが、なかなかうまくいかない。指点字のよさは、分かりやすいという点もあるとつくづく実感。また、階段のてすりは目の見えない人にとって大変助かるものだと気付いた（手すりにつかまれば階段がどのようになっているかすぐ分かる）。実際に体験することで障害者の問題を身近に感じられた。授業後昨日同様昼食。たまたま福島先生の隣に座ったため、先生とコミュニケーションをとれた。何の不自由もなくコミュニケーションがとれて感動した（緊張もしたが）。昼食後再びもう一方のキャンパスに戻り、1 人で買い物に出かけた。あちこちで本屋がどこにあ



△ 手のひらに字を書いてコミュニケーションを取る

るか聞いたが、話すことはできても語彙力がなく聞き取ることができない。中国語をもっと勉強しようと決意した。散々歩き回ったが結局見つからずホテルへ戻った。夕方から福島先生の講演。福島先生の博識さとユーモラスさに驚いた。夕食は南大生たちと宴会。疲れた人から次第に抜けていき、最後まで残ったのは 8 人。12 時まで。

3 月 20 日　　揚州へ旅行。買い物をしたかったが、そんな時間はなかった。揚州は綺麗なところが多く、天候はいまいちだったものの、いい写真が撮れた。ガイドさんの中国後を全て日本語に同時通訳している S さんが大変そうだった。さすが教養学部長や刈間先生がいらっしゃるだけあって昼食は南京滞在中一番良いものだった。夕食は羊の肉のしゃぶしゃぶ。これは日本人学生のみで。今日の揚州の話題で盛り上がり、結局他に客がいなくなるまで店に残っていた。その後何人かはマッサージに行き、何人かは帰ったが私はひとりで夜の南京市をぶらぶらしていた。昼のような活気は無く、ホームレスや路上での物売りが目立った。

3 月 21 日　　朝から虐殺記念館へ。思ったほど反日といった感じではなく、むしろ平和的だった印象を受けたが、南大生の口数が少なかったのが気になる。初めて行く南大生も多かったらしく、どう思ったか聞く勇気がなかった。虐殺記念館の装置としての意味（日本に侵略された過去を使い、中国人としての国民意識を形成する装置）について日本人学生数人と話し合った。台湾人も同じ被害を受けた同胞として展示している点が興味深かった。しかし、やはりそんなことを南大生と話すことはできなかった。その後二手に分かれ、私は明考陵へ。さすがに巨大だった。いい写真が撮れた。夕食は合流して、やはり宴会。日本文化や文学、古文、ドラマなどの話で盛り上がった。

3 月 22 日　　午前中は T さんを除いて日本人学生 6 人で本屋へ。広い。2 時間以上いたが飽きなかった。以前から欲しかった中国の珍しい金魚の図鑑を買えて幸せだった。昼ごろから張さんのお薦めで新街口へ。Kk さんと Ky さん、H 君と。S さんがいないため、なんとなく私が通訳をするはめに。まったく通訳になってなかったがなんとか乗り切った。夕方に清水先生の前夜祭。いい映画だったが中国で放映していいのか疑問だった（後で南大生に聞いたところ、ばれたらまずいらしい）。前夜祭後は日本人学生 7 人で夕食。映画について話し合った。

△ 揚州にて

3 月 23 日　　朝はいつも通り。授業はクィアの概要。心なしか学生が多い気がする。授業は分かりやすかったがスピードが速く、同時通訳が大変そうだった。また、後の討論で気付いたのだが、南大生にとって馴染みのない単語が多く、それが理解を阻害していたと思われる。昼食後カフェで討論。授業の概要と昨晩のビデオについて。討論終了後、日本人学生が各自自由に南大生に質問。私はマルクスについて質問した。中国では高校生から資本論の授業があり、マルクス道徳というものまであるらしい。せっかくだから資本論批判のハイエク、フリードマンを紹介し、マルクスの私生活が道徳からかけ離れたものであることも紹介した。タブーだったかもしれないと思ったが、S さんは天安門事件について色々と紹介していたので、私なんかは微罪だと思う。その後夕食。Kk さんが飲み足りないようだったので食後 Kk さんの部屋（H 君の部屋でもある）で S さんも交じって 4 人で飲みながらつれづれなるままに議論した。議論は Kk さんと S さんが中心になって進められたが、とても参考になる有意義なものだった。結局 2 時まで議論していた。

3 月 24 日　　昼までは昨日とほとんど同じ。ただ、昨日の授業はひたすら問題点ばかり出て、結論が出そうになく、つらいものだったが、今日の授業は結論が出て綺麗に終わり、いい授業だったと実感できた。しかし残念ながら最終日の疲れか言葉の壁か、中国人学生の数が少なかった。昼食後 W さんと 2 人で買い物に。お土産を買いこんだ。今日の南大生との討論は宴会の前に行った。

分からないところが多かったらしく、まず単語の意味の説明から授業の解説まで行った。宴会は二次会まで行い、結局 12 時まで飲んでいた。

3 月 25 日　　朝早い。バスが遅れて飛行機はぎりぎりだったが無事帰宅。

以上が 9 日間の報告です。私にとって南大生や、共に南京に行った東大生との出会いはかけがえのないもので、彼ら、彼女らとの様々な体験は一生の宝です。転勤族で、幼いころから友人との別れには慣れているつもりでしたが、たった 9 日間しか一緒にいなかったのに、南京で共に過ごした人々との別れは大変つらいものでした。それだけ南京で過ごした 9 日間は内容の濃いもので、この報告書には書ききれないことがまだまだたくさんあります。このような体験ができた私は史上稀にみる幸せ者だと思っております。最後に、お世話になった南京大学の方々、先生方、裏方で常に働いてらした石井さん、我々学生の世話をみていただいた S さん、興味深い話を聞かせていただいた東大生の方々に深い感謝の念を抱きつつ締めとしたいと思います。

2010 年度南京大学「身体論」集中講義プログラムを通じて

文科Ⅲ類 2 年 （第二グループ）

■ 集中講義について

今回のプログラムでは、「身体論」をテーマに、福島先生による障害学の講義と 清水先生によるトランスジェンダー／インターセックスに関する講義が行われた。福島先生の講義は、指点字の成立に至るまでの経緯を紹介されながら、全盲・全聾の疑似体験を行い、「障害」とは何なのかを考えるという内容であった。この疑似体験は非常に刺激的なで、「見えない・聞こえない」もたらす孤独と不安を痛感させてくれるともに、傍に支えてくれる人がいる」ことの大きさを実感させてくれるものであった。以前東京で参加した、dialogue in the dark という暗闇の中で全盲を体験するイベントと違い、今度は耳も聞こえない。つまり会話によるコミュニケーションが出来ない。世界を認識するために使用することが出来る感覚は嗅覚・味覚・触覚の 3 つのみである。従って、疑似体験においては、この 3 つの感覚に対して鋭敏になった。たとえば、パートナー役として手を引いてくれた南京大学の学生の手の温かさや柔らかさ、そして香り。ホールからドアをくぐって外に出たときの空気の変化。チョコレートが口の中で溶けてゆく様子。視覚や聴覚以外の情報が世界には溢れている。普段の我々はそれらを意識からシャットアウトして生きているのだ。これらと同時に気付いたのは、「時間」という感覚についてである。全盲・全聾の擬似状態においては、時間を非常に長く感じた。耳と目をふさぐことによって、時間の捉え方が明らかに変わったように思う。（あとで気になって質問してみたところ、本当の全盲・全聾でいらっしゃる福島先生は、時計の無い状態では「空気の匂い」で時間を把握していらっしゃるそうだ。）

△ 手を引かれて歩く

講義を受けるうちに考えたのは、福島先生は夢を見るのだろうか、ということ。夢が記憶と想像の産物であるならば、夢は実際の視覚や聴覚に関係がない。福島先生が視覚や聴覚があった時期の記憶をお持ちならば、福島先生は睡眠中に映像や音声の入った夢を見ていらっしゃるのではないだろうか。だとすれば、夢から目覚めて視覚も聴覚もない現実の世界に引き戻されることは恐ろ

しい事ではないだろうか。このことを質問してみたかったが、時間の都合上叶わなかったのが残念である。ただ、福島先生は講義において、「生きがい」を他者とのコミュニケーションに求めていらっしゃったから、映像も音声も遮断された世界であっても他者を感じられる現実の世界の方が夢の世界よりもよほど魅力的に感じられるのかもしれない。

福島先生の講義の終盤は、「障害」の定義についてであった。「障害」というカテゴリはアプリオリに存在するわけではなく、社会的・歴史的に構成されたものであるということを強調されていらっしゃった。この考え方はもちろん、ミシェル・フーコーの「狂気」に関する分析を思い起こさせるものであって、そもそも今回の福島先生の講義と清水先生の講義はこのように「社会的に構成された線引き」にメスを入れる講義という点で共通したコンセプトを持つものだと言えるだろう。

セメンヤ選手の問題を切り口に「第三の性」について扱った清水先生の授業で最も印象に残ったのは、前夜祭で見た BOTH という映画である。

この映画は相当に練られた構成を持っている。たとえば冒頭の老女がアルバムを手にしながら階段を下り、そして再び登ってゆく場面。セリフが一切無い中でかなりかなり長い時間にわたってこのショットが続くが、これは映画の主人公（インターセックスであったが、親の判断によって一方的に女にされた。）がこれから辿る運命を表象しているものだと考えられる。また、主人公が乗る愛車がフォルクスワーゲンであり、映画中に唐突に「フォルクスワーゲンはナチスが作った車だ」というセリフが出てくることを考えると、ナチスと優生学の関係を考えないわけにはいかないだろう。フォルクスワーゲンはナチスと優生学の表象なのである。優生学は「正常でないもの」や「障害者」を社会から排除し、劣等なものとして位置付けてきた。優生学≒フォルクスワーゲンに乗る主人公（「正常」ではない性の過去とアイデンティティを持っている）は、最後のシーンでガードレールにぶつかっても（あるいはぶつかることなく）生き残る。優生学的には排除の対象となるであろうインターセックスの人間が生き残る。それも優生学を象徴するフォルクスワーゲンに乗った状態で。ここに制作者のアイロニーと希望を見てとることが出来るだろう。

映画中に出てくるもう 1 人のインターセックスの子供にも、制作者の「希望」が託されている。このインターセックスの子供は、主人公と異なり、手術によって一方の性に追いやられることなく育っている。だがこの子供の将来は作品中で描かれることがない。インターセックスであることに戸惑いを覚え、社会から「異質なもの」として排除されるかもしれないし、社会がインターセックスという存在を認識するかもしれない。いずれにせよ、それはこの作品の時間を超えた未来の話である。だからこそ、「この子供が社会から排除されずに生きていけるような社会を作っていかねばならないのではないか」という制作者からの強烈なメッセージを私は感じた。

■ 学生交流について

南京大学の学生さんたちには本当に隅から隅まで気配りを頂き、中国語のほとんど分からない私でも何ら不便の無い 9 日間を送らせて頂いた。南京という土地柄、日本人の我々はどこか不審な目で見られるのではないかと心配していたのだが、それは全くの杞憂に終わった。大虐殺記念館に行った時に、南京大学のある学生に「虐殺のことをどう思うか。日本人のことをどのように思っているのか。」と聞いてみたのだが、彼は「悲しい過去はあったけど、一緒に未来を作ろう。過去を引きずるために生きているのではないでしょう。」と答えてくれて感動した。このように色々な場所に連れて行って下さっただけでなく、朝早くから夜遅くまで、中国に不慣れな我々の生活をサポートして頂き、どれだけお礼を言っても足りないほど感謝している。南京大学の学生さんたちから学んだことは大きい。詳しい内容はこの紙面では到底収まり切らないので割愛するが、日中の文化比較や政治から恋愛にまで及ぶ価値観の違いなど、話すたびに驚きを感じるものであった。同時に、南京大学の方々の語学力の高さ（たとえば、「言葉のあや」という単語を即座に中国語に同時通訳する様子など）を見て衝撃を受けた。

また、東大から参加した学生同士の間での交流も刺激的なものであった。全くの見ず知らずで集まった 7 人であったが、9 日の生活を通して寝食を共にし、沢山の話をして親睦を温める事が出来たように思う。特に今回のプログラムには院生の方が 3 人参加していらっしゃったので、院生の方々からは研究者としてのスタイルや生活など、

△ 虐殺記念館にて

非常に大きな刺激を受けた。先輩方の語学力の高さや知識量の多さ、そして議論を的確に整理する明晰さを見て、「帰ったらもっと勉強しよう。」と何度思ったか分からないほどである。多様な年齢層の参加者から成るこのプログラムは本当に充実したものであり、私にとって、今回の経験は、いつまでも忘れられない記憶になった。

これからも是非、このプログラムが続けばと思う。最後になりましたが、コーディネイトしてくださった石井先生には心から感謝致します。ありがとうございました。

南京プログラム学生派遣レポート

文科Ⅰ類 2年 （第二グループ）

■ 福島先生の授業・それに関連する討議について

中国における障害という概念、障害者の扱いについてもっと伺えたら良かったかな、と思います。ディスカッションで伺えたら良かったかと思うのですが、出来ませんでした。

福島先生の授業に関しては、1日目の授業の後だけ、南京大学の教室でディスカッションをしましたが、中国の方があまりお話しにならず、東大からの学生がもっぱら話していたような記憶が残っています。それもそれで良いのかもしれませんが、中国における障害者の社会的な位置づけ、学生の方々にとって障害とはいかなる概念なのか、といったことをもっとフランクに中国の学生の方にお話ししていただければ、また違う面白さがあっただろうと思います。

そして、そうできなかった原因は、以下の私の発言にあったのかもしれない、と思っています。勿論、議論の方向は一人の発言で全て決まるものではないでしょうし、まだお会いして間も無かったこともあり、最初の討論だったので慣れないということもあったかとも思いますが、私がもっと黙っていた方が、中国の方々の発言を引き出すことが出来たかもしれません。

私は冬学期に福島先生のゼミを受講していたのですが、その中心的なテーマは「メリトクラシーと障害」でした。「障害という概念の裏にはメリトクラシー、つまり能力で人を評価するという考え方があるよ」といったようなお話です。それを頭において討議していったらよいのではないでしょうか、と発言しました。

もしかしたら、私は、そういうことを話し合いたい、という私自身の希望を前面に出しすぎてしまって、そのために中国の方の発言を減らしてしまったのかもしれません。その後の議論はその方向で進んだのですが、特に中国の院生の方々には興味を持って頂けなかったようでした。

私が速くしゃべりすぎてしまって、日本語科の方々に、ご理解頂けなかったのかもしれません。私のどこかに中国は日本より遅れた国だ、という意識があり、それが発言や態度にも表れてしまったのかもしれません。中国の学生さんがお話したくない政治的な問題に触れるような言い方をしてしまったかもしれません。そうであったら、申し訳なかったと思います。

必ずしも私の発言が害ばかり成したとは思いませんが、討議から何かを得ようと思ったら、敢えて「思うところを言わない」ことも大切なのかな、と思いました。

このように、ちょっと失敗したかなと思った時もあった討議でしたが、最終的には東大の院生を中心とする方々がまとめて下さいました。

■ 清水先生の授業・それに関連する討議について

ご紹介いただいた参考文献を読み、講義を拝聴し、それに関して討議することで、自分があまり触れて来なかっ

た世界に触れることが出来たと思います。医療というものを相対的に捉える視点を持つ大きな契機を与えて頂けたことを、とりわけ嬉しく思います。

前夜祭の後東大の学生の方々と夕食に行った料理店で、清水先生の授業に関してはどういう感じの討議をしようかと、少し話し合った結果、中国の方になるべく沢山話してもらおう、ということになりました。

清水先生の授業の後は、2日間とも討議しました。

1日目の授業の後は、大学の近くのカフェで2つのグループに分かれてディスカッションしました。中国の方々になるべく沢山話してもらおう、という当初の目的通りに進行したかどうか、また、自分が当初の目的通りの進行に協力できたか、というのは100%YESとは言い切れませんが、悪くないディスカッションだったと言えると、私は思います。講義で分かりにくかったことを他の方に伺ったり、日本および中国の学生の方々と色々お話出来たりして有益だったと思います。

2日目の授業の後は、夕ご飯を食べるレストランに早目に行って、人数が増えてきたら途中で2つのグループに分かれて討議しました。前日と同様に、講義で分からなかったことを聞き合い、日本および中国の学生の方々と、色々お話出来て良かったです。

△ カフェでディスカッション

■ 討議全体について

討議は、院生を中心とした東京大学の学生がディスカッションリーダーのような感じで進めることが多かったかなと思います。人数が多いのでグループを分けて討議しよう、となったこともあったので、全ての場合においてそうであったのか、までは分かりませんが。

講義の分野に造詣が深い学生がいると、日本語科の院生の方々にとっても知的に面白い討議になるのではないかと思いました。その意味でも、BBSの「國吉先生、廣瀬先生Q&C」で出されている「その分野を専攻されている中国の学生さんもお呼びして議論したらどうか」というのは名案と思います。

■ 見学など

大学構内で上演されていた劇を見る機会に恵まれました。二胡などの楽器の演奏や、役者さんの歌や踊り、衣装の美しさなどを楽しむことが出来ました。独特の美的感覚を感じたように思います。

また、揚州に行って、何園、大明寺、瘦西湖を、ガイドさんに案内して頂きました。中学や高校の時に美術の授業や修学旅行で、日本の伝統文化に触れる機会があったのですが、何園、大明寺では、日本の古い庭園や建築に表れるものとは若干異なる美的感覚を感じたように思います。瘦西湖では、川辺で柳が風に吹かれているという、漢詩に出てくるような情景を見ることが出来ました。

揚州に行った翌日には、南京大学の日本語科の方々が案内して下さって、午前中には全員で南京大虐殺の記念館に見学に行き、午後は、孫文のお墓などに行く組と、台城、つまり南京の城壁に行く組に分かれました。私は台城に行きました。台城の側には尼寺がありました。やはり日本のお寺より色彩が派手な感じがしました。台城の上からは玄武湖を望むことが出来ました。台城の上で黒と白の大きめの鳥がいて、あれは何という鳥ですか、と、日本語科の学生さんに伺ったら、日本で言う「かささぎ」だと分かりました。日本ではかささぎを身近に目にすることは無いので印象深かったです。

南京の街を歩いてショッピングセンターのようなところにも行ってみました。街の喧噪を感じるのは面白かったです。店内では、精肉や魚介類の陳列の仕方が、日本の肉屋、魚屋とは違うなと思いました。日本では生きた魚を水槽に入れて売っている店は市中にはそんなにありません。

他の学生の方々にくっついてマッサージにも初挑戦してみました。体がほぐれた感じがして、体調が良くなりました。

△ 東京大学学生宿泊場所「南苑」

清水先生の前夜祭の日はフリーだったので、同行の日本の学生の方々は、大学の近くの大きな本屋に行かれました。私は授業の前に参考文献を読んでしまいたかったので行かなかったのですが「学術書が沢山、他にも色々あって面白かった」と伺いましたので、南京に再び行った折には是非訪ねてみようと思います。

■ プログラム全体について

私の内定先の認知行動科学分科は、端的に言うと人や動物の精神機構を考えよう、という学科です。内定生の私は、いわゆる心理学を中心に（脳科学も少し）勉強しています。特に、必ずしも自分がカウンセラーという仕事をすることで直接的に関わっていきたいとは思わないものの、間接的にでも臨床心理学に関わっていけたらと思っています。

そういった自分の方向性との関係で、今回の講義内容、および海外に行って現地の学生の方々とお話してみるということに魅力を感じた反面、取り立てて中国に興味があると言う訳では無く、春休み中に読みたい心理学関連の本も沢山あったので、参加するか否か大いに迷いました。

そこで石井先生に、LAPとしてはこのプログラムが学生にとって、大学にとって、社会にとって、いかなる意味を持つことを想定しているのかメールで伺ったところ、「学生にとっての意味は学生が自分で考えて見つけてほしい。大学としては、教養教育の質を高め、自ら考える学生を育てたいと思っている。社会への還元は、学生が育てば自ずと行われるはず」とのお答えを頂きました。

また、以前から色々とお世話になっていた認知行動科学分科の先生に相談してみたところ「そのような形で人と接する機会を持つことはあなたにとって必ずプラスになるはず。ぜひ行ってらっしゃい」と勧められました。新入生だった頃フランス語を教えて下さった先生に相談に乗っていただく機会にも恵まれたのですが、その先生も「若い時に新たな環境に身を置いてみることは新たな視点を得る契機になり、自分の専門を勉強する上でも貴重」とアドバイスしてくださいました。

参加を決めることにしたのは、先生がたのお言葉があったからだと、感謝と共に思います。

南京大学の方々、先生がた、同行の方々のおかげで、南京では知的にエキサイティングな日々を過ごすことが出来ました。

物理的な環境の違い、人の行動や考え方の違いに新鮮な印象を受けたと思います。交通事情や、食事や、振る舞い方、建築、広告、美的感覚など、日本では当たり前と思っていたことが、中国では当たり前ではない、そのこと自体が、自分が勉強していく上での新たな視点を与えてくれたと思います。

東京大学より同行の先輩、同輩、後輩の方々とお話する機会にも恵まれました。皆様のお話を聞いているだけで勉強になり、かつ面白かったです。この機会に自分が普段触れていない分野のお話を聞けたこともとても良かったと思います。

自分の今後の方向性という観点からも、今回の講義を聞き、それに関連する討議に参加する機会を頂けたことは、有意義だったと思います。

■ お礼とお詫び

今回のプログラムでは、宿泊先は立派なホテルで、南京大学の方々は至れり尽くせりのおもてなしをしてくださり、本当に有り難く、また勿体無いことでありました。食事もご馳走で、その上日本語科の方々が、ほぼ毎日のように東大からの学生の食事に付き合って下さって、支払いをしてくださり、まだ学生の方々なのに悪いなと困惑してしまうばかりでした。お金の面だけでなく、日本語科の方々は、通訳して下さったり、現地を案内して下さったりと、多大な時間と労力を私たちの為に割いてくださいました。それぞれ色々とお忙しいでしょうし、負担だったのでは、と、正直心配です。

お返しに、南京大学の学生の方々が日本にいらっしゃっ

た折は、ご馳走して差し上げたいのは勿論のこと、他のことでも私に出来ることがあれば是非ともさせて頂きたいです。

最後になりましたが、南京大学の方々、先生がた、東大よりの同行の学生の方々を始めとする皆様には、本当にお世話になりました。不勉強の私は、至らないことも多々あったと思います。そのことに関してはお詫び申し上げたいと思います。至らないことだらけの私がこのような形で勉強する機会を与えて頂けたことは、極めて有り難いことであったと思います。

最後にもう一度、関係の皆様には、心よりお礼申し上げます。

南京大学集中講義報告書

地域文化研究専攻　修士 1 年　（第二グループ）

■ 授業について

福島先生の講義においては、障害者に対する社会政策といったプラクティカルな次元だけでなく、コミュニケーションの問題を通して、知覚と他者・世界認識といった理念的次元にまで言及が行われた。障害学が、単に社会的マイノリティのための、権利獲得の学問であるのみならず、人間存在そのものの理解にまで変容を及ぼす可能性がある、万人にとって意味のある学問領域であることを感じた。また、実習体験があったことも「身体論」というテーマに合致した、身体を使う機会が生まれよい経験であった。

清水先生の授業では、より理論的に、そしてさまざまな言説を宙吊りにする形で講義が行われた。これも事前に映画の鑑賞があったため、作品と理論の間を往来する形で興味深く拝聴した。講義ではセメンヤの問題を軸に社会・政治・法といった領域を中心に言及が行われたが、文学や表象文化におけるクィアの問題についても詳しく聞いてみたかった。

ただ、せっかく「身体論」というテーマの下でさまざまな講義が行われたにも関わらず、最後に、各授業で提起されたトピックを、纏め上げる機会がなかったことが残念である（例えば、福島先生と清水先生の講義を受けた後、両者を突き合わせると、身体とマイノリティの問題について、どのような知見が得られるか、など）。次年度以降は最終日に、コーディネータによる総括とまとめの時間を設けてもいいかもしれない。

■ 学生交流に関して

交流会は単に親睦を深めるだけでなく、授業の内容を確認したり、レクチャー中心になりがちの授業に対して、演習・討議の要素を補ったりと、有効な時間であったと思う。後半では、修士課程 1 年の学生だけでなく学部 4 年生の参加者もおり、幅広い意見交換が行えたと思う。また、他学科の学生も交流会に参加できる機会があれば、なお交流会が充実するであろうことを、付言したい。

空港への送迎から始まって、市内観光、授業でのお世話、連日の宴会など、南京大学の学生の方たちには、これ以上ないほどの歓迎をしていただいたと思っている。これについては、感謝をしてもしきれないほどである。ぜひ、集中講義後も何らかの形で東大と南京大の学生が、学術的な側面も含めて、定期的に意見交換をする場が開かれることを望む。

■ 住環境など

宿泊先の南苑は、キャンパス内にあり非常に便利であ

△ 宴会の様子

った。部屋もきれいで、申し分ない。また二人部屋がきっかけで、東大参加者内での相互交流も進み、良かったと思う。南京の市街地は予想以上に治安も良く、生活環境について大きな不便を感じたことはなかった。

以上の通り。次年度以降、本プログラム関連の企画や説明会などがあれば、OB として積極的に参加したいと思っている。

南京集中講義 2010 春 レポート

地域文化研究専攻 修士 2 年 （第二グループ）

■ 授業に関して

まず授業に関して、私が今回参加して考えさせられたことを簡単に述べたい。福島先生の授業は、現在の社会に対する異議申し立ての方向性を考えるきっかけとして感じられた。「障がい」概念は近代以降に出現したにすぎない、という歴史的相対化に重点があるのではなく、むしろ現在の社会制度の不寛容さ――「障がい者だから配慮するのだ」という考え方も含めて――に対する批判に重点がある、ということである。個々の負っている条件に対して、適切な配慮がなされるような社会であるならば、障がいという概念で一部分をあえて括り出す必要はない。福島先生が見据えているのは、そのような社会の構築なのではないだろうか、と私には思えた。

清水先生の講義のキーワードは、「自己決定」だったが、私はこれも同じような方向から考えねばならないだろう、と思う。映画における医師と母親の判断にしても、あるいは性同一性障害をひとつの病ととらえ、患者として治療するための線引きを医学的、社会的に設けるのか否か、という問題についても、社会がインターセックスやトランスジェンダーなどの多様な存在を認める寛容さと大いに関係するだろう。むろん、そこに社会が負担する経済的コストなどの制約条件があるにせよ。ただそれを一概に、自己決定を認める寛容さと言い換えられないのは、第一に、例えば事故で障がい者になるなどの例を考えれば、自己の存在の全側面が自己決定できるわけではなく、不可抗力的に決まってしまう部分があると考えるからである。また第二に、自己決定という言葉の裏には自己責任論がつきまといがちであり、そして私の見るところ、自己責任という言葉は社会の不寛容さに容易に繋がる面があると考えるためである。自己決定というのも、不寛容な近代社会が生み出したフィクションかも知れない、という疑いが、私のなかにはある。

では、社会の寛容さとは何か、という問題になるのだが、それは人間の想像力の問題ではないだろうか。自分が相手の立場に立った状況を想像できるか、ということである。また、インターセックスなどの問題を考えるときには、いかに他者にそれを理解させるのかという問題がつねに現れるだろう。それは論理的に提示できる面もあるが、むしろ「自分が好きになった相手が偶然インターセックスだった（あるいは過去に手術をしていた）ら、自分はどう感じ、どうそれを表すか」というふうに、想像力の働きやすい方向から問題を提示するのも大切なことだと思う。

最後に授業に関しては、やはり合計 6 時間という制約のなかでは、伝えられることに限度があるということを強く感じた。また中国人の意見として、1 回 3 時間の日本語を聞きつづけるのは相当疲れ、集中力が続かないという声もあった。このあたりの時間配分は、変えるのが難しい面もあるかと思うが、今後も継続して効果をあげていくことを狙うならば、よりよい形を探ってもよいのではないかと思う。

■ 学生交流に関して

学生交流に関しては、私としては特に不満はなかったが、中国側が「接待役」として忙しく立ち回ってくれたのには申し訳ない感じがした。こちらのやりたいこと、都合を非常に気にしてくれるのだが、中国側としてはどうしたいのか、というのがあまり伝わってこなかったので、もう少し中国側が積極的でも良かったのではないか。それを引き出すのが日本側の仕事、といえば確かにそうだが、言語

的に全員の意見を集約するのが困難な中で、間に立つことになったのでとりわけそう感じたのかもしれない。

それから、お世話係と通訳を完全に分けていたが、通訳にあたっている大学 4 年にも、日本人と交流したいという人がいれば、交流を広げられれば良かったと思う。学部 1 年から 3 年は仙林に住んでおり、鼓楼―仙林間のバス便が限られているために、鼓楼に帰ってしまう日本人とは交流できないわけだが、今年 5 月に仙林までの地下鉄が開通するそうなので、来年はこの点ももう少し改善されていてほしい。

全体として言えば、日本人としては南京に行けるだけで十分楽しいわけだが、中国側が学生交流をどれほど有意義に感じられたのか、という点が問題だと思う。あと、日本側について言えば、日本人同士で会話するのではなく、積極的に中国人を話に巻き込む（ないしは 1 人でも中国人に話しかける）方向を意識してもらえれば、と思った。

南京プログラム学生派遣に参加して

表象文化論専攻 博士 1 年 （第二グループ）

今回の南京プログラム学生派遣に参加して、私は極めて有意義な時間を過ごせたと思う。何よりも中国の学生と日中関係や歴史問題、学問のことなどを理性的に語り合えたことは素晴らしい経験だったし、中国の学生たちによる歓迎も大変丁寧で温かく、初対面の人々と初めて訪れる土地で会っているにも関わらず、安心感さえ覚えるほどだった。

日本から派遣された学生と中国の学生との交流がこれほど活発に行うことができたのは、大学院生の参加の効果が大きかったように思える。それは、大学院生が学部生よりも多くの知識があるからや人生経験が豊富であるからではなく、議論の方法や作法を心得ているかどうかという小さな違いが文化背景の異なる 2 つのグループのコミュニケーションに大きな意味を持ったのではないかと考えるからである。

中国で日本の学生と交流した学生のほとんどが大学院生だったが、中国の学生はいかに東京から来た学生を迎えるかということに気を使い、特に最初のころは意見をぶつけ合うということを積極的にしようとしなかった。一方、日本の学生は、中国の学生が日本語を話すことによってできる日本語母語者の言語的優位性と、学生によっては南京で受けた先生の授業をすでに受けたりすでに予備知識があることがあり、議論を行うよりも一方的に「答え」を教えたり、「経験」や「情報」として中国の事情を一方的に聞こうという傾向が最初の頃は強かったように思う。一方的に話しても一方的に聞き手に回っても、「交流」とは呼ぶことができないが、そのような状況の中で日本の大学院生が議論を整理したり、議論の背景を補足したり、日本と中国に共通する問題を指摘することによって次第に議論の土台を作っていたように見えた。

また、現在の日本にいると中国に対して蔑視的な情報に触れる機会が多く、同時に南京という歴史的に難しい場所柄、その歴史への防御反応がナショナリスティックな感情に行きやすい。しかし、今回は中国を専門にする大学院生がいたことで、中国への蔑視にも日本へのナショナリズムにも距離を取りながら、みんな感情的なバランスをうまく取ることができたと思う。

△ 意見交換の様子

△ 明孝陵にて

だが、今回の交流が成功したことの最大の功労者たちは、南京の学生たちだろう。南京の学生たちは、空港への迎えから食事、買い物の場所の案内、観光のガイドなど中国での私たちの生活の細部まで行き届いた世話をしてくれた。またそれだけではなく、私たちを「お客」として何度もご馳走してくれた。しかし、このことは同時に南京の学生たちの負担をも意味する。今後、このような交流会が続けられる場合（絶対に続けられるべきだが）、中国の学生の負担も考慮に入れて計画が立てられるべきだと考えている。東京大学から多くの教授が派遣され授業を行うプログラムの一環として学生もまた訪問するというコンテクストがあるために、中国の学生にとってやはり普通の留学生や学生訪問を受け入れる以上の責任を感じるであろうし、日本の学生も中国の学生からのケアを必要とする以上、今回のような中国の学生にとって負担になりえるような関係はそう簡単には変わることがないだろう。そのような背景が構造としてある以上、日本の学生を受け入れる中国の学生へのサポートもシステムとして組み込んでいく必要があると思う。実質的に現在中国の学生が行っている南京の授業の補助を授業のアシスタントとして中国の学生にアルバイトとして頼んだり、日本の学生を向かい入れる際の「交通費」を支給されるだけでも中国の学生の負担はより少なくなるように思う。

今回の南京プログラム学生派遣は、留学生として日本に来ているわけではない中国の学生と交流することができて、実に刺激的な経験だった。日本語学科の学生だという理由もあるし、1 週間しか会うことがないという事実が逆に余計な心配をせずにざっくばらんに話をすることができるようになったという理由もあるだろうが、私が感じたのは「近さ」だった。人生の様々な面での悩みを共有したり、意見が異なれば互いに考えを交換することができた。しかし、同時に「遠さ」も感じざるをえなかった。日本からは比較的簡単に中国に行くことはできるが、経済的な理由で中国から日本へ行くことはまだ難しい。また、両者の間にある歴史的問題や政治的問題が時に緊張をもたらすこともあった。南京プログラム学生派遣が今後も続けられ、このような距離を少しでも縮めていくことができることを切に願っている。

東京大学学生による座談会記録

2010 年 4 月 21 日　13:00～14:30

参加者：S（D1）（第一グループ TA、第二グループ）、
W（M2）、T（B3）、Ky（B3）、Iy（B2）、H（B2）（以上第二グループ）、
Ik（B2）、M（B2）（以上第一グループ）、清水先生、石井　（学年は座談会時のもの）

石井　南京集中講義はパイロット的な授業です。そこで、今日の座談会では集中講義を続けていくか、どう続けていくかを考えるために、学生の皆さんの考えや意見を伺いたいと思います。できれば率直に自由に話してくれればと思います。

△ 集中講義を受けた教室（外観）

■ 交流について

石井　交流についてまず、だれか口火を切ってくれる人がいればお願いします。

Ik　学生交流はすごい刺激になった。日本語で交流することがよかったと思う。南京大虐殺やチベット問題について、日本語で話し合えることに感動した。普通学生交流は英語でやるけれど、日本語で話せるということで、より自由に話せるし、僕らの心に残った。

清水　逆に南京の学生が来たら中国語でやるということ?

Ik　そうも言えると思うが、いろいろな言語を使えるのがいいということ。日本語で自分の気持ちを海外の人と話せるというのがよかった。日本語で話していて、南京大虐殺についてもいろいろな意見があることが分かった。日本人と虐殺は切り離さなければならないから、後悔しても仕方がないから今後のことを考えていくべきだという人もあったし、必ず 30 万人死んでいるんだとひたすら主張する人もいた。もちろん伝えられなくてもどかしい時もあったけれど、身振り手振りで思いを伝えた。日本側からいえば英語が苦手な人でも理系でも文系でも日本語ならだれでも参加できるところにメリットがあるのではないか。交流についていえば、前半（3 月 1 日～9 日）は最初声をかけたとき、煙たがられた（笑）。いきなり外国人に話しかけられたら遠慮した人もいたのではないか。

M　実際どのくらい近づいたらいいのか分からなかった。最初は午前中講義を行った後あまり交流がなかった。南京の案内とか先生方とご飯を食べたりする機会が多かった。それもいい機会だが、南京大学の学生と交流するんじゃなかったのかなぁと思って、どうやって接していけばいいかが掴みづらかった。

Ik　最初の方は確かに話しかけづらかったんだけど、2 回目はどうだったんですか?

T　南京大学の学生は問いを発してこない傾向があるんじゃないかと思う。

Ik　BBS では質問が出てるんだから、純粋に語学的な問題ではないか。確かに授業についての議論が、1 回目の話し合いでは全く成り立たなかったけれど。

Ky　疑問文を作って疑問文で聞くのは抵抗があるんじゃないか。

Iy　お酒を飲みながらだとよく話したと思う。

清水　後半はお酒を飲みながら話したけど前半はどうだったか?

M　自分は未成年だから分からないけれど、確かにみんなお酒を飲んでいる時はよく話したと思う。きっとお酒を飲んだら気分とか良くなったり高揚したりするんだろうなと思った（笑）。

W　2 回目はもっとカジュアルで、話し合いの時（学生交流のこと）より毎日一緒にご飯を食べながら話したし、

道を歩いていてたまたま会った時に話したり、自分は英文科出身だから英文学をやっている人を紹介してもらって一緒に話した。

Ik　1 回目はレポートが忙しくてあまり付き合ってくれなかった。嫌われていたかもしれない……。もちろん最後の方はそういう壁がなくなってきたと思う。

石井　それは時期的な問題かも知れない。3 月から新学期が始まるから連絡も行き届かなかったし、レポートもあったと思う。中国側が大学院生は交流班、4 年生は通訳班に分けてきたので、最初は特に学生さんたちも言われた通りに動いていたと思う。2 回目はずいぶん混ざっていたようだけれど。

S　1 回目は小さな車で先生と一緒に移動したから、学生と一緒に行動できなかった。利用する交通機関が違うとお昼も一緒にできていいのではないか。

Ky　2 回目は帰りのバスが一緒だったので、バスの中でも結構交流できた。ひとつの場所に一緒にいるということが重要ではないか。

W　授業でグループワークがあったのがよかった。授業中に話さなければいけなかったので、そこでアイスブレイクして話せるようになったと思う。

Ik　授業の進行が遅すぎて眠くなった。逐次通訳だから遅くなったのがあると思う。

清水　同時通訳は基本的に話しの抑揚が伝わらないから、スピードとは別に聞いているのは辛いと思う。特に 3 時間だから、聞いているのは辛いかもしれない。

石井　話した言葉を電光掲示板にそのまま掲示されるようなシステムを使うことも考えているがどう思うか?

Ik　それはいいけれど、どこに注意を向けたらいいか分からなくなるかも知れない。

S　理系の先生の場合、学生同士にグループワークをさせることはあまりないのではないか?

H　簡単な実験道具を使うことはあるけれど、一般的にはスライドを見せるだけ。

Ik　廣瀬先生はインタラクティブにやっていたと思う。

S　廣瀬先生の方が問いかける形で授業をされたと思う。

Ik　後半のグループワークはどんなことをやったのか?

Ky　全盲全聾の体験授業が大きかった。目隠しして耳栓して介助者の中国学生と手を繋がなくちゃいけなくて、あれが良かったと思う。女の子と手をつなげたし。

清水　授業中にそういう場面があった方が学生としてはやりやすいのね? では、前夜祭にそういう活動があったらどうか?

S　前夜祭だとあまり時間が遅くなると中国学生が帰ってしまう。だからあらかじめ DVD を送っておいて、議論のテーマも決めておいて、前夜祭の時に夕飯食べながら討論するのがいいのではないか?

W　事前にやった方が効率がいいこともあると思う。映画にしても、何か調べてくるにしても、たとえば東大でも事前にメンバーで集まって勉強しておくとか、なにか機会を設けておけばこちら側にとってもいいと思う。

石井　ディスカッションするテーマを学生さんが決めるのは難しいですか?

清水　授業と別ならいいけれど、それに合わせて授業してくれと依頼しても難しいかもしれない。でも、授業内容が分かった段階で、学生同士で話し合いをし、中国でも話し合いをしてもらってそれを現地で突き合わせるのはいいのかも知れない。

石井　ご飯食べながら話した方がいいんですか?

全員　会議になると緊張するので、やはりご飯を食べながらの方が話しやすい。

W　中国の学生はダブルスタンダードで、パブリックでの表現と私的な部分の表現が分かれている。カフェとか飲み会の場になると、今回のようなテーマ(身体論)なんかは自分の感覚が重要だと思うが、そういうこともたくさん話すことができた。

Ik　それ賛成します。

Ky　会議だと日本語の間違いを恐れると思う。

石井　学生交流は実際にどういう風に進んだんですか?

S　日本側が説明して中国側が聞いているという感じ。

T　こちらの問いかけが主導だった。

W　中国の学生はだいたい授業の内容は聞き取れていて、福島先生の場合は日中文化論の話題になっ

たのと、清水先生の授業はクィアという概念自体が分からない人が多かったので、Kk さんに概念の説明をしてもらうグループと議論グループに分かれた。中華レストランでやったけれど、結構深い話になった。哲学や自由と共生の問題を議論した。レストランでやったからといって、話がおしゃべりに流れるわけでもなく、真剣な議論ができたと思う。

T　障害に関しては問いかけてはこなかったと思う。

W　交流会の場所の設定の問題で、お互い仲良く話をする場なのか議論する場なのかが分からなくて困った。

Ky　後でご飯も一緒に食べるんだし、それとは違う交流をしなきゃいけないのかと思って迷った。交流会の位置付けを考えた方がいい。

清水　逆に午後を空けた夕ご飯中に話してもらったほうがいい？　予定は考えなおした方がいいかも知れない。

Ky　予定がきつかった。日本側も中国側も疲れていたと思う。お昼の時間も短いし。

S　キャンパスが遠いから朝も早くなるし、昼も 40 分くらい車で移動なので、負担がかかっている。

清水　鼓楼キャンパスでできたらいいと思う。キャンパスを移動することで全員に負担がかかっていたのではないか。

S　バスの中や食事中も、人をばらした方がコミュニケーションがとれる。

W　学生交流の時にはお互いに代表を決めて、学生同士で事前に話し合いを始められるようにできないだろうか。学生が能動的に動いた方がいやでもコミュニケーションをとれるようになるから、そういう風にセッティングした方がいいと思う。

S　1 回目はその意味でも交流がしづらかった。往復の車も別だし、食事も別だったので、お互いに声をかけづらかった。

石井　みんなに活動費を渡しているのだから、それを使って学食で食べるのもいいのではないか？

S　でも昼食をセッティングされてしまっていたので、自由がなかった。

△ 中華レストランにて議論

M　後の方はバスで一緒に帰った時もあったけど、その時は話ができた。

S　宿泊場所もあった。2 回目は南京大学の中に泊っていたので、一緒に帰りやすかった。

清水　いきなり自由に食べてくださいと言われたら、困るんじゃないですか？

Ik　授業前に誰かに連れてってと頼んでおけば大丈夫じゃないか。

石井　初日のみセッティングしておいて、あとは自分たちでやってもらってもいいかもしれない。

W　今回のスタイルはあながち悪いばかりではない。日本の先生との交流や通訳担当の学生とも話ができたので、メンバーが固定されずに新しい人と話せてよかった。担当の先生と話せる機会があるといいと思う。

S　晩ご飯にも先生が来るといい。

Ik　先生が参加するのは反対。学生が固くなる。昼食と夕食はメンバーを分けた方がいい。

石井　では、昼は今回のようなスタイルにしておいて、夜は食事しながら話し合いをしてねというセッティングの方がやりやすいですか？

清水　今回お昼に参加したのは通訳だけじゃないよね？

S　2 回目はだんだん好きな人たちが参加するようになった。でも 1 回目は状況が違ったと思う。基本的にバスで一緒に帰ることにして、お昼については可能な範囲で設定するとすればいいのではないか。

石井　お昼については、できるだけやりやすいように計画を立てるようにはしたいと思います。基本的に帰りの

△ 南京の先鋒書店にて

バスは一緒でよいという方向で話をすればよさそうですね。

■ 活動費について

石井　活動費の使い方はどうでしたか?

Ik・Ky　全部使い切りました。本などをたくさん買ったし、余ったものは 2 回目に派遣された人に渡して使ってもらった。ただ、少し多かったようには思う。

石井　本来なら移動費や食費もそこから出してほしかったのですが。

W　普通に使っていれば、使い切ってしまう額だが、向こうのホスピタリティがあって、タクシー移動や食費は全部中国の学生が出してしまう。こちらで出すというと、中国に来てくれたんだからと言って南京大学の学生さんが出してしまった。最後の夕食だけこちらが先手をとって払ったので何とか支払うことができた。ホストとしてのプライドがあるから、向こうも払いたいのだと思う。

石井　もし学生が東大に来たらどうしたらいいか?

全員　その時はこちらからおごらないといけないと思う。活動費をプールしておいて、先方を迎え入れるときに支払うようにした方がいいのでは。

S　人数で言うと受け入れ側の方が多いから、まだ支払いやすかったと思う。向こうが大勢で来て少数で招待したら大変だけど、大勢で招待すれば何とかなると思う。

W　せっかく後半は盛り上がったのに、戻ってくるとそれで終わりになってしまうのがもったいない。だから今後も繋がりが続くようなシステムを作った方がいいと思う。学生同士連絡が取り合えるといいと思う。

石井　ではどんなシステムを設定すればいいと思う?

S　個人の努力でもいいのでは?

清水　個人の努力だとその個人が卒業すればとぎれてしまう。そうではなく、蓄積できる組織があった方がいいとは思う。

石井　今年だけではなく、毎年行って毎年来るかもしれないので、それを考えた組織があるといい。Ik くんはサークルを作ろうといわれていましたがどうですか?

Ik　OB 会のようなものはあった方がいいと思う。

W　企画案から学生が入るチャンスがあるといいと思うし、来年の企画を立てるときに僕らも参加することができる。直接連絡を取ることもできるし。

S　南京の学生の意見も聞いて企画に反映させることができると思う。

清水　学生は運営に直接入れない方がいいのではないか。RA を取るとなると上下関係ができてしまうし、学生が運営に絡むと逆に東大の学生の自由度が減る可能性がある。だから LAP を代表して話さない形で、学生の独立した組織があった方がやりやすいと思う。

石井　となるとみんなの中で自主的に組織を作ってもらうことになりますが、どうか?

W　かっちりした組織にしなくても、だれかを代表にして連絡の取りまとめをする場所をまず作ってはどうか?

S　そうすれば知り合った中から留学する学生があった時、そのお世話もできると思う。

■ 宿泊施設について

石井　宿泊した部屋はどうでしたか?

全員　快適だった。

Iy　二人部屋が良かった。普段は話せない人と話ができたのが良かった。

H　Kk さんと 2 人の時は真面目に話してくれた。日本人だけで話してもそれはそれで面白い。

Ky　一人部屋の選択肢が最初にあるとどうしてもそれを選んでしまうが、選択できないようにして、話ができるように設定するのはいいと思う。フルタイムで話す機会があっていい。

M　1 回目は一人部屋だったけれど、S さんの部屋に集まって話をしたときはすごい楽しかった。日本人同士とも話したことがためになった。こういう機会でないと出会

えない人と話せた。

石井　後半は大学の中に宿泊したのですが、不安はなかったですか?

S　自由で良かった。大学の中のホテルで自由があった方がいい。

Ky　朝ごはんのメニューが変わらないことを除けばいい場所だった。

W　本当にそのご飯がいやなら自分で買いに出ることもできる。

M　女性は人数比のために 1 人になってしまうことが多い。中国の学生寮に入ることはできないか。

△ 南苑（第二グループ宿泊先）内装

■ 今回の活動で得たもの

石井　最後に聞いてみたいのは今回の活動で得たものは何か、ぶっちゃけたところを具体的に教えてください。

Ik　ぶっちゃけ自分は右翼少年だった。でも今回参加して、いかに自分が先入見に毒されていたのか、メディアの力がいかに自分に強く働いていたのかが分かって、驚いた。

M　中学生の頃、小林よしのりを読みすぎていて自分も傾いていた。今回行ってみて、そんな風に右翼だとか左翼だとか、台湾は独立すべきだとかすべきでないとか、はっきりと言える問題ではなということを、当たり前なんだけれど気づかされた。中国人と話していてもそうだし、一緒に行った日本人と話していても、ぶっちゃけて言えば帰ってきたときは自分のことがよく分からなくなっているくらいで……はっきりしたことを何も考えられない状態だった。何を得たかと言われれば、この世の中にはっきりしないこともあるんだということが分かった。

石井　分かります。私もいつもそう感じさせられます。

S　得られたものは縁だと思う。つまり人とのつながり。今後留学に来る人もいるかも知れないし、どこで出会うかわからないけれど。Outlook でグループ化したら、30 個近いアドレスが今回増えた。なるほどこうやって増えると実感した。それが良かったと思う。

石井　S くんは中国へ留学していましたが、その時と比べてどうですか?

S　留学していた時は留学生宿舎が閉鎖的だったのもあるけれど、1 人で彼らの中に入っていかなきゃいけないのが大変。ある程度かたちがあって、日本人何人かで一緒に中国人の中に入って行って、しかも相手も交流するんだと分かっている方がやりやすい。留学はかなり 1 人で苦しまないといけない。そういう意味で交流の機会として大変よいチャンスだった。

W　自分の専門はイギリスなので、海外のことも知っていると思っていたんだけれど、如何に自分がユーロセントリックにものを考えていて、如何に自分が偏見に満ち溢れていたかが分かった。それに大学院に入って、専門的なことしかやっていない。そういう中で学年や専門の違う共通基盤のない人と話せたことが自分の知識に対する考え方を揺るがした。それが良かった。自分の場合は中国語も少しやっていたので、中国語ができればこれだけ世界が広がるんだという可能性を提示してもらった。帰ってから毎日中国語をやって参考書を 1 冊終わらせた。言語学習のモチベーションも上げてくれたと思う。

会場　（どよめき）

H　ステレオタイプが壊されたのが良かった。それに、日本人の中でも博士や修士の学生と話せて良かった。自分は理系なので、理系の学生と知りあうことはあるが文系は少ない。今回は同じ部屋に文系の博士の方がいて、そこで学年や所属の違うひとと一緒に話せたのが本当に良かった。

Iy　交流が一番大きかった。ひとつの交流にはそれ自体価値がある。振り返ればやっぱりひとりの体験よりも他人との交流が記憶に残っている。自分も中国語を学習するモチベーションにもなった。いま週 4 コマ中国語をとっている。それにいろいろな偏見が覆された。日本人は

ブラックバスは泥臭いと言って食べないが、中国ではバンバン食べている。でも実は食べてみるととてもおいしい。だから偏見で決めつけないでやってみることが重要だと思った。

T　参加のきっかけは、専攻する臨床心理学の先生が「あなたは人との接触が足りないから、人と接する活動に参加しなさい」と言われたことだった。今回の交流では人間がどう考えどう行動するかについて、実際に人と接しないと分からないと思った。それに教育にも興味があって、こういう実験的な教育の場に参加したことがうれしかった。とても勉強になった。

Ky　語学へのモチベーションが猛烈に沸いた。S さんが中国語をしゃべったり、向こうの学生が「言葉のあや」という日本語を中国語に翻訳するのを見ているとすごいと思った。自分は英語でもフランス語でもドイツ語でもそんな風に表現できない。これから中国語もやることになると思う。それから大学院生はやっぱりすごいと思った。日本の院生も向こうの院生も同様に、語学にしても、知識にしても、議論のまとめかたにしてもすごいと学ばされることがたくさんあった。ちょうど進路に迷う時期なので、大学院に行くのもいいなと思うようになった。それから、張さんとよく話すのだが、彼女が太極拳をやるらしい。ぼくは指揮をやるが、話しているうちに太極拳と指揮の共通点で盛り上がって、それで聞いたことを反映させたら、音楽がものすごく変わった。今でも連絡はとっているので、縁という意味でもいただいたものが多かった。

■ 授業のテーマについて

石井　交流について話す人が多いようですが、授業のテーマはどうでしたか?

W　自分がアウトプットする機会があまりなかった。文化の違いを踏まえたうえでどういう視座があるかとか、それから自分で勉強する機会があると良かった。レポートも、もう少し今回の授業の内容を踏まえたうえで勉強してレポートを書くとか、プレゼンテーションをする機会を作っても良かったかなと思った。こういう授業をしてこういう風に考えたと発表できるようなアカデミックなものにしてもいいと思う。

会場　(賛同)

石井　皆さん砕けた形で交流をするのが良かったのか、それとももっとアカデミックな方向に引っ張ってほしかったのかどちらですか?

△ 第二グループ集合写真

M　交流だけになると、お金をもってもらって南京へ行って帰ってくるだけになっちゃうのが申し訳ない。

S　各先生の授業が 3 時間を 2 日で合計 6 時間だけだと本当はもっと言いたいことがあっても本質まで行く前に終わってしまうのではないかと思った。それを何とかできればいいなと思った。

石井　レポートの中には各講義の繋がりをもう少し付けてほしいという意見もあったが、それはどうですか?

S　あらかじめ先生方が集まった時にどうなるかだと思う。

清水　それは実現可能性が低いと思う。なかなか難しい。

S　今回一般に思われている身体のイメージを壊そうという趣旨があったと思うが、6 時間ではそれぞれの先生が身体概念を壊すというところまで行きつかない。それが残念だと思った。

石井　最終的に講義を聴いている学生さんの中でそれが考えられればいいと考えていた。

S　もう少し 1 人で、3 日間 10 時間くらいの長さにしてもいいと思う。

清水　それでは先生の準備負担が大きくなってしまう。だから担当してくれる先生を限定してしまうことになる。

T　私は内容がバラバラだとは思わなかった。いわゆるマジョリティとは違うところに目をやれたという点で良かった。

清水　もっと突っ込めるという話ですよね。

S　たとえば福島先生の本を読んでもこの先生の言いたいことを 6 時間で話すのは無理だなと思った。

石井　たとえば福島先生について言えば、ご専門はコミュニケーション論だと思う。そうするとそれぞれの先生が身体論というテーマを与えられて話すことになる。

清水　自分の専門とテーマをある程度重ねながら話している。だから自分の専門をどんぴしゃで話せるわけではない。それができれば一番いいとは思うが。

W　問題はむしろ学生の中で講義内容を 1 本の線にまとめるということではないか。今回の講義は個別の講義は面白いし、テーマ的にもおもろい。内容も 1 本の線につなげられると思う。ただ、聞いて聞きっぱなしで、ディスカッションに関しても身体論というテーマに最終的に帰結するのかというまとめをする機会がない。それに関してもう少しアサインメントを出して事前に宿題を出すとか参考文献を提示するとか、知的なアウトプットができるようにしておいた方がいいと思う。S さんの問題に関しても、あらかじめ参考資料を読んでいるとカバーできると思う。事前に整理していた方が自分でも聞きやすいし考えやすい。

S　レポートが課されれば、書きながら考えるのでいいと思う。今回のレポートは要求が高くなく、プロジェクトに対する感想を書けと言われたので、書き流してしまった。

石井　レポートは南京の学生には課しているが、東大の学生は制度的に単位を出せないので、課さなかった。もうひとつは発表の機会を作ることですよね……。

清水　発表の機会とすれば、その場では難しいですよね。1 週間授業を聞いて明日発表をしろと言われても準備をする時間がないから。発表をするとすれば、南京の学生さんを呼んだときに、この前の集中講義に関して考えたことの発表を南京の学生さんたちもいる前でやるとかいう形じゃないか。

W　もしくはプレ講演のようにテレビ通信でやるとか、もう少し要求水準を低くすると南京の学生さんの前でやる必要は必ずしもないと思う。つまり、この授業の魅力は同じことを聞いていてもそれぞれ違うことを考えることだと思う。たとえば、工学系や理系の人と自分とは考え方が違う。自分と違うディシプリンの人や学年・年齢の違う人たちが、今回同じ授業を聞いてどうまとめたかを聞くことは、教養というレベルでもすごく意味をもつし、国際的にできなくても、終わった後に、春の授業が始まる前に一回集まって話し合う機会を作っていただければ、ぼくらにとっても勉強になるし、あと帰ってきてすぐ人間関係終わりということにはならないので、いいかなと思う。

石井　学生さんからそう言われるとは思わなかった。

T　先生に機会を作ってもらうより、もうちょっと自由度を確保して学生の側で話し合ってもいいと思う。

石井　これに関しては持ち帰って考えたいと思う。時間が過ぎてしまったので、最後 1 人で終わりたいと思います。

T　授業の前に南京大学の 2 年生の子が英語で話しかけてきてメールアドレスやお菓子をくれた。2 年生や 3 年生それから他学科の方々に開かれた授業にした方が良いと思う。

東京大学一週間体験プログラム

2010 年 11 月 7 日～11 月 14 日

■ 概要

2010 年 11 月 7 日～14 日にかけて、南京大学の学生 7 名を東京大学に招き、「普段の東京大学」を体験してもらうというプログラムを行った。日中の学生が討論するための開かれた場所を提供し、相互理解を深めることを目的としたため、留学生用の講義は準備せず、東京大学の授業に 1 週間参加してもらった。南京大学の学生には、10 日（水）のテーマ講義「身体論」（國吉康夫先生「ロボットにおける身体性と認知・行動の関係」）への出席の他、興味のある講義に1 日 1 コマ以上出席することを課した。東京大学からは学生ボランティアを 18 名募り、講義を紹介し、当日やその前後の補助を行う形を取った。また、彼らには自由時間における南京大学学生のアテンドも担当してもらい、日中の学生間の交流を図った。

具体的な授業以外の活動としては、8 日（月）にまず、リベラルアーツとはどのような教育なのかという点について特設講義を行った。また、8 日（月）と 12 日（金）にそれぞれ討論会を行い、「日本と中国はどう付き合っていくか」「国外で勉強すること、働くことについてどう考えるか」という問題について話し合った。

南京大学の学生には、プログラム終了後、プログラムの感想とレポートの提出を課した。

■ 日程

<table>
<tr><th></th><th>8日（月）</th><th>9日（火）</th><th colspan="2">10日（水）</th><th colspan="2">11日（木）</th><th colspan="2">12日（金）</th></tr>
<tr><td>1</td><td></td><td>ことばと文学III
齊藤希史</td><td colspan="2">テーマ講義「身体論」</td><td>日本近代法制史
和仁陽</td><td>アジア地域文化論
外村大</td><td>国際法第一部
森肇志</td><td rowspan="2">社会学概論
佐藤健二</td></tr>
<tr><td>2</td><td>特設講義
討論会</td><td></td><td colspan="2">表象文化基礎論
小林康夫</td><td colspan="2">地域民族史
渡辺日日</td><td>表象文化論
住友文彦</td></tr>
<tr><td>3</td><td></td><td>正義と幸福
中島隆博</td><td colspan="2">英語
（英語でSF映画を見る）
Stephen Clark</td><td colspan="2"></td><td colspan="2" rowspan="2">本郷キャンパス総合図書館
及び史料編纂所見学</td></tr>
<tr><td>4</td><td rowspan="3">茶道体験</td><td>キャンパスツアー</td><td>東アジア文化交流論
谷垣真理子</td><td>国際法第一部
森肇志</td><td>近現代史Ⅱ
伊熊幹雄</td><td>教育臨床心理学
前田基成</td></tr>
<tr><td>5</td><td>映画論
刈間文俊</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">社会行動論
村田光二</td><td colspan="2">最終討論会</td></tr>
<tr><td>5限後</td><td></td><td colspan="2">「国語」に思想はあるか」
第1回講演
齊藤希史</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">懇談会</td></tr>
</table>

■ 南京大学学生への課題

感想

東京での体験、大学での授業、学生との交流及びこのようなプロジェクトを行うことについて、感じたことや考えたことを率直に書いて下さい。

レポート

特設講義で与えられたテーマについて、東大生と議論し、1 週間の授業の中で考えた上で、レポートを作成してください。（字数：2000 字以上）

テーマは下記からひとつ選んで下さい

1、大学で学ぶとはどういうことか?

2、外国で学ぶ或いは仕事をすることについてどう考えるか?

3、日本と中国はどう付き合っていくか?

南京大学学生による感想

感想文

南京大学 2 年　Z.Y.

半月ほど前、私はあまりの興奮をいだいて、幸いに日本行きの飛行機に乗りました。飛行機の窓から見下ろした東京は秋の柔らかい日差しを受けて、ピカピカと輝いていました。実は、今度私にとって日本は 3 年ぶりでしたが、東京はまだ初めてです。自分が「東京大学一週間体験プログラム」の参加者の 1 人として選ばれたのを日本語担当先生から聞かれたとたん、嬉しくてたまらなかったです。しかも、東京大学のような名門校で授業を受けることが可能になるなんて本当に夢にも思わなかったものです。ですから、前からずっとドキドキしてたいへん楽しみにしておりました。

時間の経つのは本当に早いものです。帰国してから、知らず知らずのうちに半月近くも過ぎてしまいました。東大に行く前に、期待に胸をわくわくさせながら授業を選択した自分の様子がいまでもありありと目に浮かびました。成田空港までわざわざで迎えに来てくれた Yt くんの笑顔もホテルのふかふかのベッドに身を沈めた心地良さも今から考えれば、まったくつい昨日のようでした。

7 日間は人の人生に対してごく 1 瞬間に過ぎませんが、東大で過ごしたこの 1 週間で得たところはかえってかなり多いにあったと言えます。短い 1 週間でしたが、東大の学生と一緒に授業に出たり、いろんなところを見学したり、ボランティアの皆さんと多くしゃべったりすることができて、とても有り難く思っております。東大の学生の皆さんはいつも優しくしてくれたり、熱心で丁寧にいろいろなことを教えてくれたりして、本当に感動させられました。みんなと一緒に過ごした時間は僅かでしたが、東大の皆さんにだんだん馴染んできて、いい思い出いっぱいできました。みなさんのおかげで、とても素晴らしい 1 週間を過ごすことができました。この目で真の日本社会を見たり、この肌で日本の大学生活を体験したりすることで、ふだん母国の学校でどうしても学べない貴重なことをたくさん習って、本当にプラスになりました。何か困ったときいつもそばであたたかい手を差し伸べてくれて、実に助かりました。そして、授業中、熱心に講義を聞いていた東大の皆さんの姿を見て、すっかり感心しました。

ふだん母国の学校で語学関係ばかりの授業を受ける私たちは、1 週間東大でこんな幅広い分野の授業を受けることを通して、自分の物の見方の視野を大いに広めました。どれもこれも非常に面白くて、素晴らしかったものです。とりわけ、「ことばと文学」、「映画論」、「社会学概論」という授業は印象深かったです。斎藤先生の「ことばと文学」を受ける前に、夏目漱石の『坊っちゃん』を一度も読んだことのない私はこの授業を受け、わかるかどうかちょっと心配しましたが、実際に聞いてみると案外分かりやすくて、面白かったものです。日本の国語の授業で先生と学生とのインタラクションが強いところが大変ありがたく思っております。学生一人ひとりが積極的に自分なりの考えを述べます。そして、お互いに自分の考えを交流し、考えに考えることによって、新たな発見が浮かんできて、自分の見解もどんどん深まっていきます。すると、先生が講義の主導権を握る中国の大学の教え方を反省する必要がるのではないでしょうか。その授業を受けて、夏目漱石の小説に興味をもつようになりました。帰国後南大に戻って、すぐ図書館で『坊っちゃん』や『こころ』を探し、借りてきてじっくり読み始めました。刈間先生の授業で初めて「黄色い大地」という中国の映画を見ました。外国人の目から見た中国の映画はどんな様子か、またはひとつのシーンを通して監督は私たちにどういう意味を伝えようとするか、先生の詳しい説明によって、発想の転換ができて、ふだん気が付かなかった細かいところの背後に深い意味が潜んでいることがよくわかりました。「社会学概論」の授業も実に面白かったです。もともと社会学に興味を持っている私は先生の授業を聞いて、社会学に初歩的な理解ができて、大いに啓発されました。

△ レセプションにて

友だちは人生に不可欠なもので、宝物のような存在だと言えます。この 1 週間、東大の友達をたくさんつくって、いろいろ話し合ったりして、都内のあちこちを見物したり、勉強したりして、とても充実な毎日を送っていました。身をもって異文化間のコミュニケーションの大切さをしみじみ感じ取りました。いつも笑顔で優しくしてくれたマジック好きの Ka くん、元気に溢れている親切な Ys くん、運動神経が良さそうで関西弁ばかりの O さん、上品でおとなしくて責任感が強い Ms さん、いつも熱心で礼儀正しいお姉さんみたいな Ks さん、すごく真面目で根気の良い Yt くん、明るくて素直な Mt くんと I くん、大人っぽくて思弁力に富んでいる Td くん、みんなとの付き合いはそう長くありませんが、もう厚い友情に結ばれていて、みんながくれた暖かさはずっと心に残っています。一番感謝すべきのはやはりこんな貴重で素晴らしいチャンスを与えてくださった東大の刈間先生をはじめとする教養学部の先生方だと思っています。私たちのためにいろいろと工夫なさったり、なかなか得難い体験を作ってくださったりした刈間先生、石井先生及び赤木先生などに心から感謝しております。この 1 週間いろいろお世話いただき、誠にありがとうございました。大変お手数をおかけして、申し訳ございませんでした。素晴らしい思い出を数えきれないほど作ってくれた皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。

この 1 週間でなかなか忘れられないのは日本にいた最後の夜のカラオケです。人数が多かったため、私たちは 2 つのカラオケボックスに分けられました。最後の夜ですから、みんなすごく盛り上がって、時間の経つのを忘れるほど思う存分に歌を歌いました。しかし、とうとう最後の一曲になりました。Kiroro の名曲「未来へ」を歌うことになりました。この歌は中国語版もあって中国でも人気が集まっています。前向きの歌詞は離別しようとする私たちの切なさをすごく癒してくれました。中国には「離別は再会のため」ということばがあります。ですから、「さようなら」とか言わないで、また活気付いた皆さんとの再会を楽しみにしています。「来年の 3 月、南京でまた会おうね。また、いっぱいしゃべろう。また、遊ぼう。約束するから。」

感想文

南京大学 3 年　F.R.

楽しい時間はいつも短いです。今度の 1 週間もあっという間に過ぎ去りました。

日本に行って東京大学の学生と一緒に授業に出るのは、本当に初めてですから、日本に着いた前に、ずっと不安を抱いていました。

何かすればいいのかと思って、掲示板に皆さんの自己紹介を見たら、皆さんの知識の幅広さに敬服しました。「これからはもっと勉強しなければならないね」と思った同時に、「もし話題がないならどうする」という不安も深まりました。でも、1 週間を経って、それはすべて余計な心配だということが分かりました。学生たちも、先生たちも、みんな親切で、優しいです。私も「自分が東大に通っている学生だ」というように思ってきました。もうホテルからの通学道に慣れたというのに、また南京に戻るのは、残念でした。

東大と南京大学の制度はかなり違っていると思います。授業の総時間はほぼ同じですけど、1 限目の授業はここより遅くても、最後の 5 限目の終わる時はここより早い。で

も、ここでは昼休みは 2 時間あります。やはり生活習慣の違いかもしれません。私にとっては昼に数十分うたた寝をしないと、午後は眠くて授業もちゃんと聞けません。日本の学生はほとんど寮に住んでいないから、家は学校の近くにある学生もいますけど、平均通学時間からみると、やはりベットに戻って「一休み」とは、できないでしょう。いきなり別の制度に入るのは、確かに大変でした。

そして、ずっと憧れてきたサークルを見ました。よくアニメに出た、日本高校、または大学の特徴のひとつ、それはサークルです。高校時代、教育制度の違いで、そういう高校生活に体験できなかったとは、実に悔しかったです。今度の部活の見学は重きではありませんけど、各サークルの部屋、そして「文芸部」、「SF同好会」など、よくアニメに見た名前の付いたシールを見た時は、本当に嬉しかったです。アニメを通して憧れている日本の高校、大学の生活は自分の目で確かめました。「夢は実現するのだ」なんという気持で、感動の極まりでした。

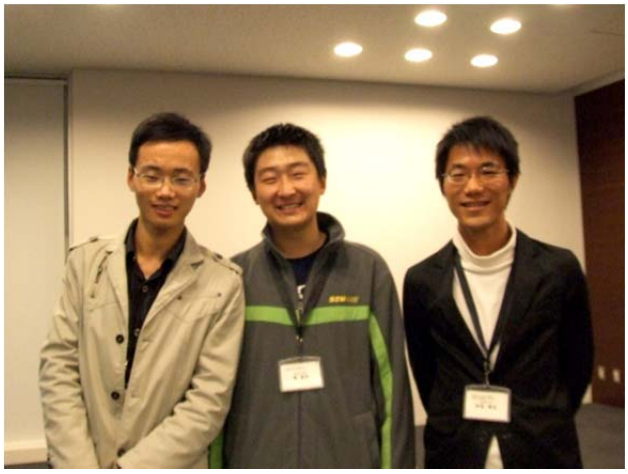
また、「研究用」の研究室は、文学のほうはちゃんとやっているみたいですけど、理科の研究室には、あちこち散らかっている本とか、漫画とかばかりです。研究に寛いだ雰囲気は必要だけど、こんなに自分勝手な研究室を見るのは、初めてです。インパクトを受けた同時に、羨ましかったです。それに、本郷キャンパスの古めいた図書館、駒場キャンパスの銀杏……。いろいろも、深く印象に残りました。

1 週間は短いですけど、私もできるだけ一定の授業に出るよう頑張りました。おかげでいろいろなタイプの先生に会って、それぞれの教え方を体験することができました。かいがあったと思います。中には、ゼミのような形の授業もあり、映画を流し、内容についてのテストを行う先生も、黒板に必死に内容を書く先生もいます。授業は日本語の上に、専門知識が必要ですから、すべて分かっていると言ったら嘘です。授業には手前準備、いろんな予習が必要なので、いきなり挿し込むのは確かに大変ですが、PPT の付いていた授業は何んとなく先生についていけたから、「助かった」のような感じがしました。私は心理学に興味を持っているかもしれませんが、「臨床心理学」という授業はとても面白かったと思います。先生もユーモアで、意外に内容もほとんど分かって、いろいろ勉強になりました。嬉しかったです。私も将来大学の日本語教師になるつもりですから、今回それぞれ先生の教え方の「見学」は、自分のためにもきっと役立つと思います。

中国にはこういう諺があります。「家では親に頼れ、外では友たちに頼れ」。東京は初めてだった私たちの頼りになりましたのは、親切で優しいボランティアと先生たちです。私たちのためにいろいろ事前準備をしておいて、私たちの無理な要求にもこたえて、1 日授業で疲れたけど、あちこち案内して、紹介してくれました。私も文句をこぼしたいほど地獄のような「女のショッピング」にもずっと案内役を果たしてきて、文句ひとつもありませんでした。ほんとに感動しました。家は学校から遠いのに、遅くまで私たちと一緒にいて、帰ったらまた明日は授業があります。本当にお疲れ様でした！ 3 月集合講義の時、こちらは絶対日本の方々の頼りになって見せます。

学生さんたちのおかげで、日本独特の二次会とか、カラオケとか、体験できて、嬉しかったです。特に茶道体験は、印象深くて、一生忘れません。皆さんと一緒に過ごした思い出は、きっと大切にしています。それに、話もいろいろしましたが、私はアニメの話ばかりの感じですけど、やはり日常会話や討論会で、教科書では習えない知識をたくさん得ることができました。日本側の友たちができて、嬉しいです。

また、先生たちにも世話になっていました。特に刈間先生と石井先生は、私たちの住所とか、授業予定とかの準備は、大変だったでしょう。石井先生はこのみやきを奢ってくれて、本当にありがとうございます。S さんと石井先生



△ レセプションにて

の身体論についての会話は、私にとっても一種の授業みたいで、また勉強になりました。

このプロジェクトは日中両方の学生の交流を促し、お互いに理解を深めることができると思います。違う国の学生たちの異なった考えの交流で、何か新しいものが出てくると思います。学生の立場からは、きっと、このプロジェクトを続けてほしいという声が出ると思います。

今回のプロジェクトに参加できて、東京大学の先生と学生の皆様からいろいろご配慮をいただき、また皆様の手厚いおもてなしに対して、衷心より感謝申し上げたいと思います。

東京一週の感想

南京大学 4 年 L.Y.

東京で過ごした 1 週間、2010 年 11 月 7 日から 11 月 14 日までの時間、一生忘れがたいです。

いろいろ勉強になったうえに、貴重な思い出もいっぱい作りました。東京にいる 1 週間の中に、勉強する場所は東京大学です。秋はもう来たので、東大の一葉は色づいてきました。駒場キャンパスはきれいな黄色に染めて、クラシックな建物とはいいコンビです。私たちはほんとうに運がよかったです。ちょうど本郷キャンパスの公開日にあって、本郷キャンパスへの見学もできました。まるでマジックの世界のような図書館が印象深かったです。東大は学術の雰囲気にあふれているような気がします。

東大でさまざまな授業を受けました。感心したところがたくさんあります。学生たちはみな授業を受ける前にまじめに予習をしておいました。授業をするとき、本文の内容を解釈することより、みんなで一緒に討論することに重きを置くのです。授業が終わる前に、先生から何か質問があるのかと聞いたとき、学生たちは黙ったままでいるのではなく、積極的に自分の意見を述べ、わからないところがあったらただちに先生に意見を求めます。これはなかなかいいと思います。

△ 討論会にてまとめた内容の発表

そして、1 週間の中で、2 回の討論をしました。南京大学の学生と東京大学の学生が混ぜてからグループに分けて、熱熱な討論をしました。みんなが大変盛り上がっていたので、ときどき時間が足りないと感じました。「大学の役割は何ですか?」というテーマについて、みんながそれぞれ自分の意見を出しました。簡単にまとめると、大学の役割は学生に知識を教えることだけではなく、学生に社会人になる技と知識を教えることにもあります。そして、勉強のほかの能力も重視すべきです。たとえば、スポーツの能力、部活に活躍できる能力、ボランテイアをよくできる能力とかいろいろあります。また、最終討論会では、学生たちは「海外で留学したいか就職したいか」、「中日関係はどうやって付き合うか」という 2 つの話題について話し合いました。中国人学生のほとんどは海外で留学したいのですが、就職はそんなにしたくないと言いました。なぜなら、中国は今一人っ子政策なので、卒業してからやはり親のそばにいてあげたいからです。日本人学生の多くは海外で留学したいと言いました。何人かの学生も海外で就職したいという意見を述べました。みんなの意見がそれぞれですが、自分なりに考えを述べたのはとても楽しかったです。中日関係のテーマについて、みんなの意見はだいぶ一致しました。それは、民間交流を深め、マスコミがより正しく、より客観的な情報を人々に

伝えるべきだという考えにまとまりました。

この 1 週間には、サープライズもたくさんありました。東京大学のボランテイアたちと出会って、仲良くなれたのはうれしかったです。みんなで一緒に浅草まで行ったり、渋谷で何回も買い物したり、夜遅くまでカラオケをしたりして、忘れられない思い出をいっぱい作りました。それに、昔の友達と東京で会えて、先輩たちと再開できて、本当に楽しかったです。

LAP のおかげで、今度私たちが東大に見学できたのです。大変勉強になったと同時に、いろいろ感心したこともあります。このプロジェクトはこれからも続けられるといいなあと私はそう思っています。

LAP一週間東京滞在から考えたこと

南京大学 4 年　X.M.

東京から戻ってからもう 2 週間も経ちましたけれども、東京の物事、また東大の皆様への想いは一時も止まらなかったのです。手厚いお持て成し、多様多彩な授業、侘しい茶室、賑やかな居酒屋。その一つ一つが私の東京への印象となり、貴重な思い出としてきちんと心の中に収めました。

そして、この 1 週間東大側の先生や学生との交流の中で、私は次のようにいくつかのものをつくづくと考えました。

一つは、文化の自覚というものです。往々にして、ずっと自分の国の文化の中に生きている人間はその文化を意識できません。2 つの異なった文化がぶつかるたびに人々は考え始めるのです。お互いに反省し、再発見、再認識することができます。だから 1 つの文化を呼び覚ますには、ほかの文化とのコミュニケーションが必要です。

もう一つは、異文化を理解するにはやはりその現場に行って自分の目で確かめなければなりません。先入観にこだわったりメディアの先導にとらわれたりしてはだめです。たとえばほとんどの日本人が慎み深くて礼儀正しくて静かな性質を持っていますので、人と交流する場合が消極的で少しぎこちないと思い込みました。しかし、今回東大の先生方とボランティアの学生たちは慎みと優しさの上にユーモアも十分あり、もって活発的で積極的な姿勢を見せました。言うまでもなく、もし今度日本に行くチャンスがなかったら、日本人を全面的に見ることはできないでしょう。

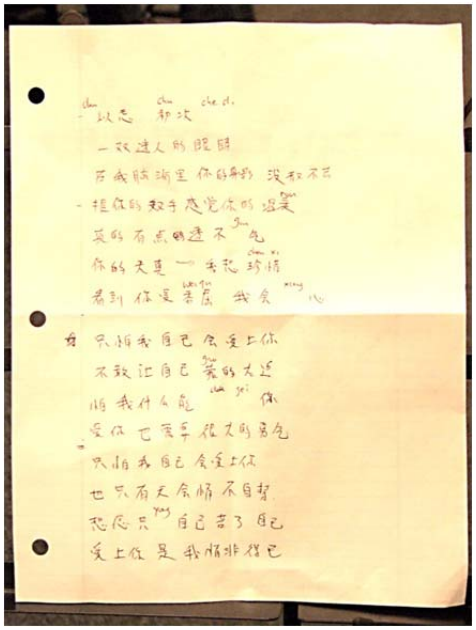
さらに、こういうような地道な交流こそ中日友好の道で、中日友好の未来はわれわれ若者たちにあります。なぜかというと、一つの異文化に出会ったら、情報の最前線にいる若者はいつも開放的な姿勢をとって、異文化を理解しようとしているからです。つまり、わたしたちはより早くその文化を受け取ることができます。ですから、このような交流を続けてやっていただければ、中日友好の明るい未来が見えます。

私の感想

南京大学 4 年　W.C.

初めて日本への 1 週間は非常に貴重な、掛け替えのできない思い出になった。日本側いろいろ工夫したお陰で、今年の LAP が完璧に幕を下ろした。そもそも、中日関係がぎくしゃくする中、今度のプログラムが計画通りに行われたこと自体が大変意義のあるものと思う。この 1 週間の収穫と言えば、華やかな東京の姿を見たこと、多彩な大学生活に身を置いたこと、無限な学問の世界に近づいたこと、日本海の向こうと結び付けたことなど、ほんとうに数え切れないほどである。

その中、一番感触深いのはやはり友達と趣味を楽しめ



△ レセプションにて演奏された歌の歌詞

ることである。

私として、文学と音楽が趣味である、お酒も自慢している。幅広く趣味を持っている東京大学の皆と知り合って、共通の趣味に通じて、東大で意気投合する友達ができたことに、大変嬉しく思っている。

W さんとの文学の話し合いはその中の一つである。W さんが村上春樹のこと非常に詳しい。双方の感心する作品について意見交換してから、私は心が溶け込んだ気がした。また、両国の村上ブームを紹介することに通じて、話に花が咲いて、直ちに親しくなった。

O さんは歓迎会のディナーでバイオリンをギターに使って、演奏しながら歌う姿が非常に印象深い。それをきっかけに、私は彼と同じ好みを見つけたのだ。『後来』という中国の歌が中国に知りわたっている。ちょうど私はこの歌の日本語版を知っているから、聞き慣れたメロディーが響いた途端、親しい気持ちが湧き出た。その場で、O さんの歌にあわせて、中国語と日本語の混ぜた歌詞が会場のムードを盛り上げたのである。

また、帰国の前日、一緒にカラオーケーで、全員が 1 つの曲を歌った時、言語と国境を越えて真の交流が始まった気がした。

両国の若者たちが共に何かをチャレンジすること、あるいは共に何かを楽しめることが友情の結びに役立つと私は深く感じ取った。私の感想の中で、この喜びをどうしても皆と分かち合いたい。

感想文

南京大学 M1　C.J.

今度の東京大学一週間体験プログラムのおかげで、私は初めて日本に行くことができました。この 1 週間、東京大学の先生と学生の皆様からいろいろご配慮をいただき、また皆様の手厚いおもてなしに対して、衷心より感謝申し上げたいと思います。

東京に着いた日の午後、Yt さんと S さんが東京大学の駒場キャンパスを案内してくれました。古典的な建物とモダンな建築と立ち並んで、道端に木がきれいに植わって、多くの葉っぱが黄色になって、駒場キャンパスは天高くさわやかな秋の午後、非常に美しく見えました。日曜日なので、たくさんの学生がキャンパスで話し合ったり、リハーサルしたり、踊りの練習をしたりしていました。彼らの姿を見て、東大のオープンで自由で多様なキャンパス雰囲気を感じました。そして、私たちはまた本郷キャンパスも見学しました。有名な赤門を見た上に、史料編纂所で史料展覧会を見学して、本当に貴重な体験だと思います。一番印象深いのは、やはり本郷キャンパスの図書館だと言いたいです。その外装と内装を見たら、私は Harry Potter の魔法学校を思い出しました。いい感じだなあと皆しきりに感嘆していました。東大の 2 つのキャンパスを見学した後、私は心から東大の皆さんがうらやましいです。東大で大学生活を暮らしていいなあと思わずにはいられなかったんです。

また、今度のプログラムのもっとも重要な内容として、私たちは東大でいろんな授業を受けていました。私が主に法学部の授業を選んだのです。堅苦しい内容なのに、

先生は分かりやすく説明してくださって、法律についての基礎知識に欠けている私でさえ大体理解できました。一緒に授業を受けていたMsさん、TdさんとYtさんは何冊かの厚い教科書を持って、補足説明をしてくれて、ここでもう一度ありがとうと言いたいです。それに、皆さんがまじめに授業を聞く、一生懸命メモを取る姿にずいぶん感心しました。法学部の授業のほか、私はまた教養学部の表象文化論のいくつかの授業、そして「身体論」の集中講義、「ことばと文学」などの授業を受けていました。これらの授業と講義の内容の多くはそれまでぜんぜん接したことがない分野の知識なので、分からないところが多かったが、新しい発想や面白い点もいっぱいあって、いい勉強になりました。また、特設講義の討論会と最終討論会を通じて、私たちは大学の役割と、日本と中国はどのように付き合っていくかとの2つのテーマをめぐって東大の学生さんと話し合って、意見を交わしました。考え方はそれぞれですが、皆交流した後、互いに理解を深め、新しい問題視点も発見しました。

授業や討論会だけでなく、東大の皆様は様々な活動をも手配してくれました。歓迎会や茶道体験や東京めぐりなど、東大の学生さんと一緒に過ごした時間が短かったけど、すべて記憶に留まり、美しい思い出になりました。そして、茶道体験は本当にまたとない貴重な体験でした。茶人の先生が高級な茶室や茶道具などを見せて、説明して、お茶さえも入れてくださいました。非常においしかったです。また、土曜日の江戸東京博物館の見学もいい勉強になりました。建物や国民の生活や文化など、江戸時代の東京を全面的に紹介してくれました。私たちはこんな活動を通じて、日本の江戸時代の歴史に関する知識を広めることができました。この 1 週間、東大の学生さんはずっと私たちを伴い、一緒に渋谷や銀座や浅草寺などを歩いたりしてくれて、ここでもう一度お疲れ様と言いたいです。それに、最後の日、空港で贈ってくれたものが大好きで、心から感動しました。

今度のプログラムは、私たちにとって、学習の機会でもあり、東大の学生と知り合い、友達を作る機会でもあります。皆さんが私たちに対する友情が肌で感じ取れ、この 1 週間も一生忘れられない経験となりました。このプログラムはこれから毎年続けていいなあと期待しています。

△ 最終討論会の様子

東京大学一週間体験プログラムについての感想

南京大学 M2　C.W.

東京大学一週間体験プログラムのおかげで、11 月の7日から14日まで、東京へ行って、東京大学の授業を受けて、東京大学の学生と一緒に交流して、都内見学もした。この 1 週間を通して、私に、多い感想を生み出させた。

今回、私は東京大学の「ことばと文学」、「身体論」、「映画論」、「国際法」、「日本近代法制史」、「表象文化論」などの授業を受けた。このような授業、例えば、先端技術としての身体論は、中国で、受けたことがないから、知識面と視野を広めて、研究の方法も教えてくださった。これによって、自分がまだたくさんのものを勉強すべきのがわかってきた。それに、授業を受ける時、東京大学学生が耳を済まし、筆記をつけ、激しく討論するような勉強の雰囲気、態度と真面目さに、本当に関心しておる。

9 日と 12 日の午後に、駒場と本郷の図書館を見学した。図書館に蔵書と資料がたくさんある。しかし、中国で、

△ 最終日懇談会

日本研究についての資料が少ないから、こんな所に、研究できるのに、とても羨ましい。いつか、わたしも、ここで、勉強できればいいと思う。もう一つの貴重なチャンスは、東京大学史料編纂所を見学したのである。第 35 回の史料展覧会にめぐり合って、これによって、日明時の両国の協力と友好行き来がわかってきた。

この 1 週間に、毎日東京大学の学生と交流している。東京大学の学生は優しくて、熱心である。みんな、一緒に、生活、勉強、文化などについて、いろいろなことを話し合って、私の日本語発音と話し言葉を高めた。東京大学の学生たちは、私たちを、日本の庭、博物館へ連れて行って、日本の古代の文化、発展の歴史を詳しく説明してくれた。それに、茶道体験に通じて、日本茶道と中国のつながり、茶道の礼儀と心境を理解した。

1 週間は短いだが、いい勉強になって、今後の勉強と研究に本当に助かった。東京大学の学生と、楽しい時間を共に過ごしてくれて、素敵な思い出を残した。このプログラムが毎年続ければいいと思う。もし、チャンスがあれば、また、東京大学へ行って、もっと日本のことを体験して、日本のいい所を習って、中日友好に、自分のほんの力を尽くそうと思う。

南京大学学生によるレポート

日本と中国はどう付き合っていくか?――隣人を愛し、ともに平和に生きる

南京大学 2 年 Z.Y.

中国と日本、一つは 5000 年以上も長い歴史を持つ堂々たる大国で、一つは世界でしばしば奇跡を行う経済強国である。両国はアジア、ひいては全世界で欠かせない大きな役割を果たしているので、アジアにおける経済大国である中日両国の関係の良否は、アジア、あるいは、世界の繁栄と安定に重大な影響を及ぼすことになる。中国と日本は一衣帯水の隣国で、昔から長い交流の歴史を持って、まるで兄弟のようである。しかし、両国間の歴史は単なる友好史であるばかりでなく、血も涙もこもごも入り交じった戦争史でもある。特に、近代に入って、戦争のせいで、元々親しい兄弟仲が悪くなって、敵になってしまった。戦争により、両国民の感情が大いに害されて、両国の間に厚い氷の壁ができた。それは中国人にも日本人にもなかなか望ましくないことだと言ってもいいくらいである。中国には、「遠い親戚より近くの他人」ということわざがある。従って、どのようにすれば中日関係をうまく改善できるか、どのようにしたら相互理解を深めていくかといったことは今日最も重要な課題になっている。

東京大学へ一週間体験プログラムに参加して、日本の学生さんといろいろ言葉を交わした上に、両国間のわだかまりを解くにはキーとしてたえまなくはかる「交流」そのものはどうも不可欠だと結論が出てきた。それに対して、大学生としての私たちに出来ることはなにか、または両国の政府にしてほしいことはなにか、などについて東大の皆さんと意見交換をしながら、積極的にいい知恵を出そうと思って、自分なりの考えを述べたい。

まず中日ウィンウィン関係を築くなごやかな雰囲気が必要である。

今になって、中日両国の間にまだ調和が良く取れていないところがある。例えば、靖国神社の参拝、尖閣諸島(釣魚島)の領土権などの歴史問題、いわゆる「中国製ギョーザ中毒事件」、反日デモ等の中日に関した事件は両国の関係にマイナスの影響をもたらした。中日関係をうまく改善するなら一方の力、一方の願いだけではどうしても無理だろう。両方とも前向きな態度をとって、小異を残して大同に就くべきである。できるだけ各分野で多種ルートを通じて、プラスになる互恵関係を築くものである。両国の政府は誠意を以って、実行できる良案を出す限り、両国人民は心を合わせて、一つになる限り、すべてはスムーズに運ぶことができると確信している。それらがすべて可能になる前提はウィンウィン関係にいいムードを作り出すわけである。中日国交正常化、特に中日友好平和条約調印以来、中日両国で物的交流にせよ人的交流にせよ、喜ばしい成果を収めたにもかかわらず、その広さ、深さはまだ足りないようである。更に協力合作を強め、相互理解を深める必要がある。

経済面において、両国は互いに大きな優勢を補い合えると思う。中国は世界で人口が一番多い国で、日本にとってとても広い市場である。そして、中国では労働力も日本より安いし、たいへんいい投資国だと言えよう。それと同時に、日本は先進国で、管理理念も先端技術も非常に優れて、中国人には学べる価値がある。これから、中国と日本は親しいパートナーになって、お互いに刺激し、更に経済成長率を促進できるとともに、アジアないし世界の人々に利益をもたらすこともできる。

そのほか、環境保護や新しいエネルギーの開発も目前に迫っている。例えば、毎年の春、中国からの黄砂が風と共に日本の天空をおおって、日本人がたいへんな被害を受けた。そのために、大勢の日本人は毎年中国に来て、共同でわざわざたくさんの木を植えてくれる。これらの木々が大きくなったら、環境を美しくしながら、空気もきれいにする。一方、緑を大事にして、木製の割り箸を控えるべきである。中国も日本もお箸を使う国で、両国の人口を合わせて、15 億近くのぼるから、1 人で 1 日に 2 本のお箸を使うなら、どのぐらいの木々が要るかは想像も及ばない。だから、できるだけ木作りの割り箸を使わない

ほうがいいと思う。そのほかに、ゴミの処理、汚染の防止等に対して、両国も協力し合うべきである。中国も日本も燃料なんかに貧乏である国である。すると、どのように新しいエネルギーを開発するかはとても大切な課題である。両国で頑張りさえすればきっと立派な成果をあげると思っている。

次に、両国間の青少年をはじめ、幅広い年代の人々の交流を強めるのは賢明な対策である。が、中日間の民間交流が盛んに行なっている一方、政府間の交流がやはり足りないような気がする。中国と日本は文化面において、書道とか茶道とか伝統的な芝居など通じているところがたくさんある。もしこれらの面で、政府が主になって両国間の文化交流をはかることができたらと思っている。

青少年は国家の未来で、将来国家の重任を担うようになる。中日ウィンウィン関係を築くには数多くの青少年間の交流が必要である。高校の時、私は幸いに日本の姉妹校に行って、3 ヶ月の留学生活を過ごしていた。日本にいた時、ホストファミリー、学校の先生や生徒、そして知らない日本人は皆やさしくしてくれて、その肌で日本人のやさしさと親切さをつくづく感じた。そして、日本に対するイメージもとてもよくて、「日本語を勉強して、本当によかったなぁ」と思わず感嘆した。これから、大学を卒業して就職すれば、中日交流の架け橋役の外交官になりたいという考えが涌いてきた。また、今回の交流活動も中日両国の大学生をより良く理解し合うために、実に有効な役割を果たしている。日本から帰国してから、その肌で体験していたことやその目で見た日本人の真の姿を周りのクラスメートや友だちに伝えることによって、周りの人々も日本に対する印象が自然に親しくなるものである。青少年は友好の使者である。もし両国間の青少年がよく理解し合ったら、何十年もの後、中国と日本はきっと新しい未来を迎えると確信している。それに、子どもの心は紙のように純白である。彼らの心に友好の種をまいたら、将来はきっと空高くそびえる木に成長できるだろう。

△ 最終討論会にて

最後に相互理解を深めるための提案はマス・メディアへの希望である。マス・メディアは発達した今日では、両国間の相互理解を一層深めるためにたいへん重要な役割を果たしている。マス・メディアはいろんなところで導くことや決定的な要因をしている。私は日本に 3 ヶ月間滞在していた時、よくテレビや新聞で中国に関する様々な批判があった。例えば、「中国の一人子政策」やら「農製品は農薬規準を超え」やら「中国の歯磨き問題」等いっぱいあって、頭もゴチャゴチャになってしまった。特に、今年の 9 月に起こった「尖閣諸島」もひどく中日両国の人民の感情を害した。マス・メディアが個別事件としての問題を大げさに取り上げて、不確実な報道をしたら、必ず誤解を生じ、思いもよらない問題が起こるわけである。マス・メディアの報道は客観、公平、公正である。マス・メディアは交流の媒介としてきわめて大きな役割を果たしている。実は、ちゃんと交流するために、お互いの真の「信頼」は何より大切だと思う。これも基本的なポイントだと思う。マス・メディアはありのままに事実や真相を報道したら、いい雰囲気を造り、両国の間のわだかまりもいつか消えていくと思う。

要するに、中日関係はまるで生まれたばかりの赤ちゃんらしく、私たち一人一人の真心をこめた守りと祝福が必要とされている。これからの道は困難が続くかもしれないが、もし皆新約聖書に書いてあるとおり、「隣人であるならば隣人を自分のように愛しなさい。そうすれば永遠の命が得られる」と言う言葉を心ゆくまでよく覚えたら、中日関係はきっと行動的な「ウィンウィン」になる日が早く来るだろうと思う。若者としての私たちは、そういう使命感をもつべきである。

大学で学ぶとはどういうことかについて

南京大学 3 年 F.R.

幼稚園から小学校、中学校、そして高校、ずっと勉強してきた私たちは、ついに大学に入った。昔から大学は「学校」と「社会」を結び付けるもっとも大事な一輪とみなされていて、「小型社会」、「模擬社会」とも呼ばれている。この大学で学ぶとは、どういうことだろう。

「小型社会」といい、「模擬社会」といい、大学はあくまでも学校だから、私たちも学生の役を演じ続けなければならない。つまり、大学で学ぶとは、まず、昔とほぼ同じだけど、知識を学ぶことだ。

そうは言え、宿題に追われ、先生に見張られる習い方と違って、大学では自由な雰囲気があって、自発的な習い方を主としている。大学生たちは以前よりも多くの自由時間を持ち、大学図書館という知識の宝庫の利用も便利で、確かに以前よりも、多量の知識をマスターすることができる。しかし、十数年もずっと勉強させられてきた学生たちに、突然に自由を与えると、もともと勉強に抵抗のある学生たちは遊びに夢中して、ただ最低限の勉強をするのも十分にありうる。特に中国では、大学に入るのは極めて難しいけど、無事卒業は意外に簡単だから、大学に入って、こういう「堕落」の学生の数も少なくない。

そこで、大学の自由の中でも、自分を見失わないで、まじめに勉強し続ける学生たちにとっては、勉強の支えは大きく 2 つに分けていると思う。一つは、ある領域の知識への興味。もう一つは、いい仕事に就くために知識を身につけなければならないという緊迫感と自覚だ。で、ここで問題がきた。もしこの学生の興味のある学科と、学ばなければならない、つまり、この学生の入った学科が違って、理科と文科のように遠く離れている場合、自分の興味を追いつけ、苦労して 2 つの学科の知識を同時に勉強するのか、1 年かけて、転科試験で、また 1 年生として好みの学科で学ぶのか、あるいはこのままで、ただ卒業だけでいいのか、学生は迷って、何を勉強すればいいのかさえ分からなくなってしまった。このような「堕落させられる」学生もけっこういる。また、特に中国では、高校まで国語、数学などの基礎知識しか勉強していない学生たちは、ほとんどは自分のイメージで専門学科を選ぶ。さらに、点数のせいで、別の学科に回されるのもありうるから、当たって砕けるというところだ。この状況で、それらの「堕落させられる」学生たちは生じた。でも、東大の進学振り分け制度はこの問題をうまく解決したと思う。大学 1 年生、2 年生の時はさまざまな授業を受けることで、自分の興味にあって、適合した専門を選ぶことができて、「堕落させられる」学生の数も最小限に収められた。

そして、「学校」という本質のほか、大学は社会の一部の役割を果たしているのも忘れてはいけない。大学は「小型社会」、「模擬社会」と呼ばれている点からみると、大学で知識だけを学ぶのは足りない。つまり、大学で学ぶもうひとつの課題は、「世の中」。

「学校」と「社会」の関係は、「純粋な子供の思い」と「汚い大人の世界」のように思われる。「学校」は私たちを「社会」の暗い面から離れ、「社会」のいい所を宣伝して、私たちの純粋を守ろうとする同時に、私たちを世間知らずの人間に育てた。大学を出て、世の中に入ると、「上司には気に食わないな」、「この人は信用できるのか」、「さっきの言葉、何か別の意味あるの」など社会人しかない問題が出てくる。ここでは基礎知識とか、専門知識とかは、すべて役に立たなくなる。処世の経験や知恵がないと、うまく対応できず、出世は難しくなる。だから、大学で「世間学」を学ぶのも必要とされている。幸いに、大学は「学校」に守られていて、「社会」も接触できる場所を提供した。大学では、アルバイトやボランティア活動を通じて、社会人と接触するチャンスがある。また、生徒会、サークルなどの機関で、「模擬会社」のように体験することができる。さらに、大学でいろいろな学生と友たちになり、先生との関係、友たちとの関係の対応も将来「人間関係」の練習の一種だと思う。それに、今度東大の学生と議論した時、「金銭関係で、つまり働いて給料をもらうと言う金のやり取りをしないと、この社会の本質を知ることはでき

ない。この社会に入り込むのも無理の話だ。」という考えも出てきた。確かにそうだ。十数年も学生を演じ続けた私たちは、世界の広さも、世間の複雑さもわからない。世間の激流に流されないため、大学では、多少「人間関係」とかを学んだほうがいい。

また、東大の学生との議論の中で、勉強に一筋、人間関係はうまく対応できない学生、サークルに活躍しても、勉強に来ると、あまり目立たない学生は、日本でも中国でもいるということがわかった。大学では、人間関係でも大事で、知識の勉強でも大事だから、両者のバランスを取るのに注意しなければならない。

要するに、大学で学ぶとは,一つは現況の緊迫感、自覚と興味のもとで知識を勉強することで、もう一つは社会に出るための「人間関係」と「社会学」をマスターし、処世経験を積み重ねること、そして最後、2 つのバランスをとることだ。

大学で学ぶとはどういうことか

南京大学 4 年 L.Y.

東大で 1 週間の見学からいろいろ勉強になりました。月曜日の最初討論会で刈間先生が「大学で学ぶとはどういうことか」というテーマを出してくださいました。私たちと東大の学生さんたちはグループに分けてこのテーマについて討論しました。また、1 週間の中、東大で授業を受けながら自分なりに考えました。

東大の学生との討論では、みんながそれぞれの意見を出しました。まず触れたのは、中国の学生と日本の学生の違うところでした。いろいろ話し合った結果、2 つ大きな違うところに気づきました。一つはアルバイトで、もう一つはボランティア活動です。中国の学生はあまりアルバイトをしないのは事実です。それに、ボランティア活動にも日本人学生に比べるとそんなに積極的とは言えません。そして、就職難の問題についても意見を交わしました。中国も日本も、今は就職難の時代ですから、中日両国の学生たちは若干迷っているところがあります。結果として、どちらの学生も大学で専門知識だけ教えるのはなんか足りない感じがして、社会人になる必要な知識も教えるべきだと思っています。

それから、火曜日から授業が始まりました。いろいろな授業を受けることによって、さまざまな先生にお目にかかりました。東大の先生たちは授業でテキストの中の知識を教えることだけではなく、世界的視野を持って、新しい情報と最先端の発見を学生たちに伝えます。また、自分の経験から出てきた感想も学生たちと分け合います。1 人の教授が旅行で撮った写真だけで民族問題をめぐる 1 こまの授業が出来ました。もとより面倒な課題が写真という形によって生き生きとなりました。それに、駒場キャンパスに歩いているうちに、生協の近くのところで歌の練習をしている学生たちの姿がよく目に入りました。踊っている学生もたくさんいます。もっと身近なことから言うと、ボランティアの皆さんと付き合っているうちに、多くの人がそれぞれのクラブに参加していると知りました。平日、授業が終わってから、ある学生がサッカーをしに行って、ある人はマジックの練習をしに行きました。東大の学生たちは勉強だけが上手ではなく、部活にも活躍していると痛感しました。

身をもってこれらを経験した私は、4 年生になってからはじめて大学で学ぶとはどういうことかということについて真剣に考えました。大学の「大」には 2 つの意味が入っていると思います。一つは「多い」で、もう一つは「大きい」です。「多い」というのは、文字通り、知識をもっと多く学ぶことです。大学とその前の学校の違いは「大」にあります。もしその前と同じように、受験のために少ない科目に限って勉強するのは大学にならないではないでしょうか。大学で専門知識を学ぶのは当然ですが、ほかの分野の知識も少しでも身につける必要があると思います。ずっと専門知識だけにこもっていれば、知識の面が狭くなってきて、視野も狭くなって、結局自分の心も狭くなる恐れがあります。ですから、大学での時間を生かして、いろいろな

分野の本を読み漁ったほうがいいと思います。雑学家を目指してがんばるのも一つのいい選択ではありませんか。

もう一つ、「大きい」というのは、キャンパスが大きくなるべきだということではありません。学生たちを導いて、社会に出る前に、必要な社会文化を教えるべきです。ということは、大学生たちはずっと学生のままでいられないので、いつか社会に出なくてはいけない日が来るに決まっています。大学は言うまでもなく、学生たちが社会人になる前最後の訓練の場です。そういう場所で専門知識を勉強するとともに、社会知識も身につけなければいけないと思います。社会知識といえば、人間関係がもっとも大事なものです。東大でみんなと一緒に討論するとき、誰も人間関係がなにより大切だと言いました。なぜかというと、人間関係がスムーズかどうかはこれからの人生にかかわっているからです。大学での人間関係は宝物です。友達がいっぱいできたら、大学にいる間にはさびしい思いはそんなに多くないでしょう。そして、仕事をし始めたら、困ったとき話し相手もいるし、仕事上にもお互いに協力できます。また、人間関係をうまくできるのは仕事場で欠かせない能力です。社会人になってからはじめてそういう能力を学ぶのは遅すぎます。ですから、大学でその能力を身につけることは大切ではないでしょうか。

そもそも、どうやってそのような目標を果たしますか。まず、選択授業をより多く設定することです。理科系の学生に文科系の授業を進め、同じように文科系の学生に理科系の授業を進めます。授業の内容の実用さと面白さを重んじるべきで、そんなに専門的なものを教える必要はないと思います。そして、基礎的な授業を適当に必修科目に入れたらどうかと思います。たとえば、社会学概論、法律入門のような基礎知識を教える授業を 1 年生、2 年生の必修科目に入れたほうがもっと効果的だと思います。それに、大学では仕事向けのクラブとかを設定するのもいいでしょう。そのクラブで、人間関係を中心に訓練をしたり、仕事場を模擬して面接とかの活動を行なったりするのは学生たちの就職に役立ちます。最後に、各学問分野の教授を招いて、講座を多ければ多いほど行なう必要があると思います。心理学とか、哲学とか、歴史とか、物理化学とか、学校で毎日たくさんの講座があったら、学生たちの授業以外の生活も豊かにしてやれるし、大学生たちの視野を広げることもできます。もちろん、学生自身も覚悟を持って、積極的に部活に参加して、いろいろな本を読むべきです。勉強も学びも、あくまでも自分自身のことですから、自分が努力しないと何にもならないです。

△ 最終討論会の様子

以上述べたのは、私が東大で見学した 1 週間およびその後、「大学で学ぶとはどういうことか」について考えたものです。まだ未熟な考えとは知っていますが、一応私の考えを言いたいので、ここに書いてあります。これからも、学生生活を送りながらこのテーマについて考え続けたいと思います。

日本と中国はどう付き合っていくか

南京大学 4 年　X.M.

去る 12 月 13 日の午前 10 時から 10 時 33 分までの約半時間のあいだ、悲惨そうなサイレンが南京の上空を響き渡った。南京大虐殺遭難者記念館には 5000 人弱の軍民が集まり、日本軍に虐殺された遭難者の死を悼

んで、世界の平和を祈る儀式が行われたそうだ。新聞や雑誌はそれに紙面の多くを割り当てた。

そういう歴史的事件がゆえんで南京で日本語を勉強している私たちの立場はどうも微妙なのだ。友達から大学の専攻を聞かれて日本語だと答えると、話がすぐ日本軍の侵略に変わってしまった。われわれ日本語クラブも時々そんな目にあって、何かの催しを行ってもできるだけ目立たないように行動するのが慣例である。そうしないと、回りから変な目つきを浴びる恐れがあるからだ。

今の中国では、若者はさておき、私の両親や祖父母の世代には日本のことというと、頭ごなしに批判するのが一般的な状況だ。というのは、上述した歴史的な悲しみが人々の心に住み着いているからだとは言えるでしょう。

一方、船舶衝突事件や尖閣諸島の所有権の問題は日本でも中国でも大騒ぎになった。ここ数年和らいだ中日関係はまた緊張度が高まった。中国のテレビニュースでは中国政府が日本側に対する厳重声明や日本国内で起こった静座などが毎日流れていた。同時に日本も同じく中国で「盛ん」に行われた反日デモを大幅に報道していた。

東京大学一週間体験はちょうどその敏感期間にあった。実に言うと、私も不安を抱きながら、東京へ旅立った。一度行ってはじめて心配する必要はないということが分かった。日本の政治、経済、文化の中心である東京は人々が政治への関心が少なくてほとんど自分のことに集中して、むしろ中国よりも安定な日常生活を送っているとのだ。国内の報道とは正反対で驚きのあまりだった。でも

△ 最終討論会の様子

もっと考えるとそれも当たり前のことだ。もしその間日本の方々が中国へいらっしゃったら、反日デモがいくつかの都市に限ってそれほど「盛ん」ではないという事実も分かるでしょう。しかも、両国間はいくら情勢が張っても、民間交流の中では相変わらず手厚く接待されている。

結局、緊張度が高くなったというのは国と国との対立に限るだけで、1 人 1 人の国民の間の対立ではないはずだ。従来、国際関係は国益次第なのだ。世界の国々は同じ国益で密接に結ばれる一方、異なった国益のせいで摩擦や衝突が相次いで起こっている。新しい世紀を迎えて以来、日本は低いながらも穏やかな経済成長を示したのに対して、中国はすさまじい発展を遂げている。このままのペースで行けば、日本が世界第 2 位の経済大国の地位を中国に譲り渡す可能性が強まっているという中国脅威論を賛成する人は日本だけでなく、世界中にもかなり多い。これは中国経済の量的発展を強調しすぎるからだ。全面的に見ると、中国が経済上日本を追いつく、追い越すには質的な成長を求めなければならないのだ。中国の電子産業や自動車産業などは日本のそれに頼って独立自主の道を探しながら発展している。それと同時に、小さな島国である日本は、石油、石炭などの資源や安い労働力などが中国から輸入している。だから、現在も近い将来も両国は互いに競争し合い、依存し合う仕組みで発展し続けるでしょう。経済発展の影響もあって政治の面では中日は互いに制約しながら国際政治の舞台に活躍するのが考えられるでしょう。だから、一時的に多少緊張度があっても当然のことだと思われている。

したがって、中日交流というのは国益を最優先とする国家の交流と利益を目的としない民間交流との 2 つの体系に分けて考えていくべきだと思っている。中日の両国関係が氷河期に落ちても、両国の国民が数々の民間交流によってつながっているのだ。中国と日本ほど互いの民間団体が頻繁に交流している国はないといっても言いすぎではないでしょう。毎年行われている日本を感知する作文のコンテストや南京での植樹に通じた「緑の贖罪」や日本語図書贈与活動などがその最たる証だ。しかし、この前尖閣諸島の所有権の紛争で両国の民間交流プロジェクトの一部が遅延、キャンセルとなり、両国の民間交流関係者たちの間に不安が広がっている。でも私から見

れば、中日関係が困難なときこそ、両国の民間交流を強めなければならないのではないか。

中日関係の流れを見極め個人経験を元に、メディアの先導も中日交流の中でかけがえのない作用を発揮していることが明らかになった。一国のメディアは国民が他国を見る窓でもある。もしその窓に埃や塵などが厚く積んでいれば、部屋の中の状況が分からなくなるでしょう。つまり、メディアが隠さずに事実を伝えなければ、国民が自分の国のことも相手国の状況も知らぬままで愚民になる恐れがあるのだ。今両国のメディアともが報道の全面性にかけている。両国の衝突が報道されるのが常で自国政府に有利な情報だけ流したメディアはあくまでも政府の宣伝道具に過ぎない。だから、中日友好の未来は公開、公正、公平なメディアを作り上げることにもあるのだと考えている。

最後でありながら、歴史を鑑として、透明且つ開放なメディアの先導によって、積極的な民間交流を架け橋に、中日友好が世世代代続けることを祈ってやまない。

大学で学ぶとはどういうこと

南京大学 4 年 W.C.

この問題について、私はずっと前から考えたことがある。1 週間のプログラムを終えて、東京大学の学生生活をそっくり体験した後、さらにこの考えを固めたのである。

大学で学ぶとは、一言に云えば、『修身』だと思う。

2000 年前誕生した中国の『大学』という経典には、儒学の先賢がすでに教育の目的について次のように纏めておいた――修身斉家治国平天下。これは 2000 年にわたって知識人の信条として崇められてきた。今日に至って、立身出世とか、社会の中堅になるとか、国を治めるとかが引き続き声高に訴えられているが、私はその礎となる『修身』を提唱したいのである。

大学の役割は、健康な、健全な、独立した人間を育成することである。生理的に丈夫だけではなく、心理的にもヘルシーな人間でなければ、人間とは言いがたいであろう。もし、心理的に何か歪みがあれば、社会に毒を流すばかりである。大学生による高知能犯罪のケースが、中国でも、日本でも恐らく少なくはないだろう。それに、正確な価値観、独立的な精神も不可欠である。

修身というのは、大学で学ぶことに即して、次の幾つかの側面に分けて説明しよう。

第一、知識

知識と言えば、専門知識を指しているわけではない。特設講義で日本の皆と話し合った時、両方とも大学の歪んだ現状に注目した。大学はある会社の専属学校になる恐れがある。いわば、大学に入ってから、ある大手企業に目処を置いて、これからそこで就職しようとする、いい進路のために勉強する傾向が強まっていることである。学校で学んだ知識は職場に使う場がないとしばしば文句に言われた。ひいては大学無用論も頭をもたげている。しかし、これらの論調が最初から大学の位置づけを間違えているではないか、そもそも大学は会社のため、国のために存在するわけではなく、人間のための存在であるべきだ。リベラルアーツが各分野の授業を一括して伝授するやり方がこの考えにぴったりだと思う。ある授業が面白くないように見える、ひいては無用のように思われるが、いつかきっと知らずうちに巨大なパワーになるに違いない。特定分野の知識だけではなく、文学、歴史、宗教、哲学、心理学、芸術などが合わせて初めて立派な人間を培うものである。

第二、個性と人格

知識に基づいて、心の豊かな人間まで成長するのは、大学で学ぶ意義の一つである。

文学を味わい、人間の喜怒哀楽を感じ取る。歴史を読み、時間の重厚さに心を落ち着かせる。地理の勉強に通じて、世界の広大さに胸が広げられる。芸術の陶冶で、生活への敏感さを養う。周りの人との交際で、人間関係を築く。こうして、華やかな内心と多様な価値観を身に付けることできるようになる。つまり、大学が絶えずに新たな

自我を発見し、成長するところである。

東京大学史料編纂所 5 年一度の展示を幸いに拝見できて、貴重な思い出になった。国宝の史料を目に当たりにするよりも、心が打たれるのは、編集者の執着である。編纂所で 20 年働き続けて、2 冊の本を出す我執に尊敬の気もちが湧き出た。これは、国の歴史を明らかに活字にする、後代、そして人類、日本、そして世界に責任感を持たない人なら、どうしてもできないだろう。名誉と富がもたらされていないにも関わらず、この人文の精神が何より貴いものである。

第三、独創と開拓

駒場キャンパスでは、『真空』の展覧会に際して、先代から続けてきたこの分野の研究は科学精神の相続だけでもなく、独創の精神の受け継ぎでもある。技術が実験室から持ち出されて、食品の包装に応用するのは、科学をもって生活を改善する例である。満足することなく、絶えずに深く、広く研究するには、独創の精神が必要である。

今年まで、東京大学のノーベル賞受賞者が 5 人を数える。それに比べて、中国のほうは痛切に肩身の狭さを覚える。学術の雰囲気が勿論大いに影響しているが、その根底に人間が欠如であろう。中国は今、空前の公務員ブームに見舞われている。公務員の受験生の中で、大学生が大半を占めている。この現象から、大学生、また中国全体が安定を求め、積極的に取り込む熱意を失いつつあることが分かるだろう。大学でさえ満足しているのか、私は強く問いかけたい。

第四、経験

大学はより自由に勉強する場を作り出している。そこでは、幅広く勉強できる。1 週間の勉強の中で、中国国内で封殺された映画を見て、そして日本人の目から、文化大革命の背景に即した新しい解読が非常に面白い。華僑と華人を紹介してくれた先生が広東弁も堪能、親しい内容の上に親しい言葉、大変感心した。公共空間論の授業で、学生の地下鉄の空間に関する発表を聞いて、なるほど身近にそんな学問も発見できるのだと悟った。中国と血に繋がっている華人の学生さんとの出会いも掛け替えの出来ないものである。今日では、有名の大学がだんだん国際化しているところ、東京大学も世界各地からの学生を集めて、各分野において、盛んに行われている。つまり、大学では、最先端の学術を勉強し、自分を高める。先生と知り合って、忘年の友情を築く。十人十色の学生と交際し、お互いの思いやりを培う。さらに、友達とチームワークしたり、部活で共通の趣味を楽しめたり、国際友人と出会ったり、自立でバイトしたりする、いずれも貴重な経験になる。

こんな経験も大学でしか出来ないもので、自分を成長させ、視野を広げる絶好な場であろう。

以上は 1 週間東京大学の生活からの感触である。未熟な考えでありながら、大学の意義の発見に少しでも寄与できれば、幸いの至り。

大学で学ぶとはどういうことかについて

南京大学 M1 C.J.

大学という言葉を聞くと、誰でもまずプロ知識を学ぶところを思いつくだろう。高校時代と違って、大学では国語、数学などの基礎知識の代わりにある専門知識を勉強することになっている。その専門知識を身につけることによって、大学生たちは社会で自分の役を見つけて、働いて、そして、社会運営の一環として役割を果たしているとされている。

しかし、現に、こういう過程に問題が出てきた。一つは、志望した学科に入ることができない学生が多い。特に中国では、受験人数が多すぎるので、志望した学科に入られるかどうかが大学入学試験の成績で決められるしかない。それゆえ、中国では、ぜんぜん無関心の学科に回され、転学科も面倒くさくて、まあ、このままにしようと卒業まで我慢してきた学生は少なくない。これが人材の流失

になってしまうのではないか。志望した学科に入ったら、ずいぶんポテンシーがあるのに、別の学科に回され、4 年の大学生活をおろかにしてしまうというのは、残念なことだと思わずにはいられない。このような問題に対して、どうしたらいいのかというと、東大の進学振り分け制度、つまり「Late Specialization」の考え方が一つの解決方法を提供してくれると思う。大学 1 年生、2 年生の時、自分の関心を持った授業を受けて、そして中からもっとも興味深く、適合した専門を選んで、試験に合格したら、順調に進学するという制度は学生にも学校にも一番公平で有利なのだろう。また、今度東大の学生と議論した時、皆もう一つの問題を提示した。すなわち、今の日本でも中国でも、人材の供給と需要にバランスが取られていないということだ。たくさんの学生は就職難に直面し、それに就職後、大学で学んできたものが入った会社にちっとも役立てなく、真新しい知識を伊呂波から習わなければならないという場合も多い。これは新入社員にとっても大変だし、会社の能率アップに対してもマイナスなのだろう。この問題を解決するには、大学と企業とのつながりを強めるべきだと思う。東大の進学制度の下で、学生が専門を選んだ時、興味などのほか、自分の就職志向を考慮にも入れて、そして企業や機関などのニーズを理解した上で決めたほうがいいのではないか。さらに、大学は企業との交流によって、社会が今どんな人材を必要としているのかという情報も手に入れて、それに応えて、一部の教育政策を調整することも可能だろう。

以上は大学で専門知識を学ぶことについて論議してきたが、そのほか、大学はまたいろんな面で貴重な資源を提供して、積極的で大きな影響を与えてくれたのだ。

大学時代は青春の一番美しい時期だと言えるだろう。この時期において、我々が生理上で成人して、心理的にもだんだん成熟していく。大学の図書館や講演などのおかげで、学生は知りたがったものがいつも見つかり、見聞を広げることができる。ところが、ただ知識量を増えることだけでなく、大学はまた問題発見、問題に対する考え方などについて教えてくれる。例えば、今度東大で聞いた國吉康夫先生の「身体性から創発する行動と心」という講義がとても印象深かった。いろんな実験とデータを通じて、それまで人々に受け止められた脳が一方的に身体

△ 最終討論会にて

の動きをコントロールするという理論を覆し、「身体が脳を作る」という新しい概念を提示してくれた。この概念は啓蒙的で、そして、先生の既存の知識にとらわれなく、クリエーティブな真理探求の精神にずいぶん感動した。こういうスピリットは我々学生にも不可欠なのだろう。また、刈間先生の講義も大変勉強になった。物語の筋や登場人物の性格を中心としていなく、演出された象徴的な映像が持つ意味の多重性を論議して、映画を読み解く斬新な視点を紹介してくれたのだ。このようにもっと広い視点から見て、新たな「知」を求める物事に対する見方は学術研究にとって本当に大切なのだと思う。以上書いたような大学で育成された思考能力は今後一生の勉強に影響を及ぼすのだろう。

さらに、大学に入ってから、皆故郷を離れて、あるいは家を出て、高校時代と違って、何事でも自分 1 人の力で対処しなければならなくなる。性格の面でだんだん成熟してきて、一人前の社会人になるために様々な準備をしている。この点から見れば、大学は学校から社会への橋渡しとしての役割を果たしていると言えるだろう。また、大学ではいろんなクラブ活動があって、参加していた間、様々な人と知り合い、人間関係の面で各種の問題を対処しはじめるのだ。と同時に、たくさんの友達ができて、社会に入ってから、自分の人脈となっている。そして、学校からもいろんなプログラムを提供して、海外に行く機会や国外の名門大学を見学するチャンスなどを与えてくれる。今度の「東大一週間体験プログラム」もその中の一つだろう。こんなプログラムを通じて、学生間の国際交流ができて、互いに理解を深め、両国の友好にもプラスに

なるのではないかと思う。

要するに、大学で学ぶことは我々の知的な発展に大いに役立て、大学時代は人の成長に不可欠な段階だと思うのだ。

大学の社会職能から大学のすべきことを見る

南京大学 M2 C.W.

はじめに

大学が社会奉仕を展開することはとても必要で、今の社会において、大学は開放的な思想と観念を堅持して、できるだけ発展を求めなければならない。大学は社会奉仕を通して、一つの外部世界を理解する窓口を作って、絶えず社会からのフィードバック情報を獲得して、人材培養と科学研究に方角を示して、大学に発展する動力と活気を獲得させることができる。それと同時に、公衆と社会にもっと大学を理解させ、大学が社会に社会効果と利益をもたらすことができるのを知らせて、これによって大学の発展を支持させる。これは同様に大学生の就職及び大学生が早く社会に適応するのに有利な条件を提供する。そして大学の社会奉仕は社会の要求だけではなく、大学自身発展の要求でもある。そのゆえ、本稿は大学の社会職能から、大学のすべきことを検討しようと思う。

一、大学の社会職能

大学職能は高等教育の実施を主要な任務とする機構である。大学職能の内包は 2 つの方面があって、第一は「何をすべきだか」ということである。この意味で、大学職能はひとつの社会機構としての大学が生存し、発展する根拠である。第二はどんな程度をやり遂げることができるのである。この意味で、大学職能の実現は自身条件、社会発展と社会需要の制約を受け取らなければいけない。台湾学者の林清江は以前大学について「第一は真理を追求して、新しい事物を見付けて、変遷と革新を早める。第二は全方位な教育を行って、知能、卓見、人柄がある社会成員を育てて、社会の流動を形成して、また平等に進歩を促進する。第三は文化の基準を伝達する。第四は知識をそれぞれの階層に推し広めて、社会の求めに応じて、社会生活の水準を高める。第五は上述のそれぞれの責任を尽くして、人類社会の公明な歴史を作ることに協力する。」といった。以上の言うとおり、大学は自分キャンパス以内の学校教育だけに注意を払ってはいけなくて、キャンパス以外の社会にも、特に社会の求めに応じて知識をそれぞれの階層に推し広めることに注目すべきである。この点から見ると、大学の具体的な社会職能は以下の幾つかの方面がある。

1、高レベルの社会教育を実施する。大学は知識、高品質の文化と価値観の権威で、知識権威機構の身元で個人ないし全社会の律動を制御して、知識占有のレベルで社会のレベルを構築して、高品質文化の育成と高レベルの教育の実施で精神気質がある社会成員を育てて、そして、これらによって、文化的な伝統と精神的な伝統を維持して、社会の主流文化を導くのである。

2、社会精神を描く。知識経済の時代に、大学の社会に対する貢献は社会に知識を提供するに限らず、社会精神の作り手の重責を担うべきである。社会精神を描くのは 3 つの方面がある。1、大学自身の「社会良心」の手本、2、「社会良心」を持っている新公民の培養、3、社会への教化と批評。

3、時代風潮を誘導する。大学は社会の傾向と社会文化の主流を誘導しなければいけない。現在の大学は知識を研究したり、思想と学問を生じたりするだけでなく、社会に理想的な行為モデルを提供して、社会の発展を誘導し促進して、時代風潮の誘導者になるべきである。

二、大学の社会教育職能を実現するアプローチ

1、開放的な大学教育を建設する。学習型の社会で、いかなる社会教育機構でも文化教育の潜在能力を掘り起こすべきで、大学も同じである。学習型の社会で、学校は 2 つ重要な職能を担わなければいけない。第一、人々が一生勉強した基礎を培養する。第二、社会メンバーに様々の勉強機会と文化活動に参加する機会を提供

する。

2、ネットワークによって社会に開放する。ネットワークの早い普及は学校が社会に広範囲で、良質の教学サービスを提供するために、不可欠な物質基礎を提供して、学校教育がいっそう大きな作用を発揮するために条件を創造した。それゆえ、大学は自分を社会の共同財産として、社会の要求に基づいて、社会住民に学校場所と施設を開放して、図書館と校舎の開放を含める 24 時間の教育、勉強と文化サービスを提供する。これは学校の社会文化教育中心としての責任である。同時に、大学は社会に読書会と講演会を含める各種類の文化交流活動を提供する。

3、学校生活と社会生活と統合する。人が全体の環境に教育されるから、教育は継続的で調和な環境でなければならない。学校の開放は学校が家庭、社会と協力する面で建設されるべきで、学校生活と社会生活お互いに統合しなければならない。だから、学校は充分に社会教育資源を利用して、学校課程資源と社会資源を一致に統合させる。学校は社会生活中に融かすべきで、生活と緊密に結びついて、生活によって自分の力を増す。大学は意識的に社会文化教育資源を開発したり、利用したりするべきである。たとえば、学生を集めて、博物館、展覧館を見学して、社会奉仕、社会機構への実践に参加して、社会図書館、体育館、ネットワーク系統の使用を励ますことなどは、全部採用できる形式と資源である。いっそう重要なものは、大学が学生の具体的な情況に基づいて、学校と社会の課程資源を統合するのである。例えば「協調学習」と総合実践活動課程である。協調学習は学生校内の学習と校外の学習を結び合わせる方法である。総合実践活動は学生が自分の生活する世界の中から興味がある主題と内容を選ぶことを要求して、学生の操作能力と自らの体験を強調して、学生総合実践能力の形成を目指して、学生が自我、社会、自然の内在つながりに対する全体認識と体験を提唱する方法である。このような方法によって、学校生活と社会生活と統合するのは必要なものだと思う。

終わりに

21 世紀にはいってから、大学の社会職能はますます重要になってきた。いま、大学はただ学問を教える機構だけではなく、社会の機構でもある。大学は社会機構だからこそ、社会への貢献、学生の就職、学生の社会への適応に対しても、注目すべきである。そのゆえ学校は各方面から自分の社会職能を強めて、一層社会、民衆と学生に奉仕しなければならない。

△ 最終討論会題目

東京大学ボランティア学生による座談会記録

2010 年 11 月 17 日 16:30～19:30

参加者:W(M2)、O(B4)、K(B4)、I(B2)、Ms(B2)、Mt(B2)、Yt(B2)、Ys(B1)、Tc(B2)、U(南京大学留学生)、石井(LAP) (学年は座談会時のもの)

■ なぜこのプログラムに参加したのか

石井　感想、印象、それからなぜこの活動に参加したのかをお聞かせ下さい。

Ys　金曜 5 限後、自転車を取りに行くときに、情報教育棟の掲示板の前にボランティア募集の掲示があった。それでやろうと思った。これは国際交流じゃないかと思って参加した。折角大学生で時間があるなら他の人と触れ合ってみたかった。参加してみてすごく楽しかった。南京の人たちとふれあうのも良かったが、それより年上の学年が上の先輩たちと触れ合えたのが良かった。博識な人が多くて、会話がすごく真面目だった。特に何先生や Yt さん、Td さんと話した時、すごいと思った。

Yt　日本史について雑談した時のことだと思う。

石井　都内見学はどこを回ったんですか?

Ys　江戸東京博物館、浅草寺、①銀座、②根津美術館、③秋葉原の 3 グループに分かれた。

石井　先輩たちとの会話が面白かった?

Ys　それがすごい新鮮でした。みんな真面目なのが良かった。

Yt　僕の最初の動機は、以前台湾へ行くプログラムに参加したことで、自分が行って、今度台湾から来た人たちを歓迎するというもの。それが面白かったので、このプログラムにも参加した。だいたい海外交流系のプログラムは外務省や民間企業がやっているもので、東大のプログラムはあまり聞いたことがない。それで参加した。しかも授業を一緒に受けるというのが面白かった。感想は、皆さん日本語がうまい。C.J.さんとC.W.さんと一緒に法学部の授業に出ていたので、C.W.さんは 28 歳で年上なのに気さくに話してくれて面白かったし、C.J.さんは太宰治の研究を、W.C.くんは夏目漱石の研究をしていて彼らが見た近代について話を聞けて面白かった。

石井　台湾のプログラムとはどういうプログラムですか?

Yt　歴史の史跡や省庁や大学を回るものばかりだった。だから一緒に授業を受けるのはすごく新鮮でよかった。

石井　台湾の人たちが来た時も省庁などを回ったんですか?

Yt　台湾と関係のある機構を回ったり施設を回ったりした。一緒に授業を受けるのが良かった。

U　東京大学の学生が南京に来た時、自分は討論に参加した。その時は午前中に授業を受けて午後に討論をした。東大の場合は授業が午前も午後もあり、少し混乱していた。南京大の人たちの主な目的は授業ではなく観光だったので、時間の組み合わせが混乱していて大変だったようだ。2 限と 4 限の間に観光をするなど。ただし、確かに授業を受けた方がいいと思う。南京大学が東京大学とこのような交流事業を始めてから、学校のシステムも変わった。もともとは 1 年生の時に専門をはっきり分けて、4 年生までずっと専門を勉強したが、今は最初の 2 年間は基本的なものを勉強し 3 年生になってから専門が決まるようになった。こういう学問レベルでの交流が大切だと思います。システムだけでなく、授業の形式や内容も違うから。南京の学生が来て東京大学の授業を感じて、帰国後に南京大学の先生や行政の管理者と話し合って南京大学の授業や学問のレベルまで、これから改善していけると思う。今回は体験で終わるかも知れないが、もし、南京大学の管理層に対して学生たちが感想を言えば、南京大学も学んでいけるのではないかと思う。これから南京大学の発展にも役に立つと思う。

石井　南京大学のシステムが変わったのはいつですか?

U　自分が 3 年生の時。日本学科の先生から東京大学の影響で変わったと聞きました。

石井　今回の授業は初めて全部日本語で、日本語を使って他分野を学ぶことになったのですが、レベルとし

てはどうでしたか？　身体論の授業では南大からの質問が減ってきていて心配しています。

O　　先週の授業は皆、正直分からなかったと言ってました。

石井　　でも意見は言っていた。F.R.くんはロボットが身体を持つこと自体おかしいと。内容が難しいのか言葉として難しいのかどちらなんでしょうか？

U　　身体論については、聞いたことがないが、C.J.さんと Z.Y.さんが表象文化論（小林康夫先生）の授業を聞いてさっぱり分からなかったと言っていた。

Yt　　それは日本人でも難しい。

石井　　14 回の授業を 1 回だけ聞くのは南京の学生にとって大変だったかも知れない。

Ks　　応募のきっかけは 2 つあり、1 つは相関社会の ML で回ってきて、もう一つは TA セッションを担当している S さんから紹介されて参加しようと思った。そもそも自分も交流授業が好きだった。感想としては、すごい楽しい 1 週間を過ごすことができた。私も Yt くんが言ったような台湾との交流事業に参加したことがあって、その時と比べると今回の交流は学問的だと思った。また、今回はボランティア自体が即席だったが、他のプログラムでは学生が何カ月も用意するものだった。

O　　僕に関しては 2 つ。ひとつは大学がやっている国際交流というのがすごい新鮮だった。僕は経済学部にいるんだけれど、学部では交換留学もないし、留学生もほとんどいないので、大学が国際交流をやっているというのがすごく新鮮で惹かれました。もうひとつは、個人的に中国人と知り合いたかった。9 月に内閣府がやっている授業で、訪日中国人学生団と 1 泊 2 日で交流をしたが時間が短くて深い交流はできなかった。このプログラムなら1週間あるし、一緒の授業に出て議論したら深く交流できるのではと思い、参加しました。

△ レセプションにて（中央は何先生）

石井　　深く知り合えましたか。

O　　それはできましたね。一緒に過ごす時間が多かったし、真面目な話もカラオケにも行けたから両面から交流できた。観光に一緒に行った上で、最後にディスカッションをする。信頼関係があるから爆弾みたいな質問もできた。

石井　　1週間一緒にいたので、普通に知り合っただけでは言えないことも言えたということですね。深く知り合うには何がきっかけになるんでしょうか。

O　　観光など一緒に行くことと、カジュアルな部分で信頼関係を作ることと、絶対的に過ごす時間が長い方がいいと思う。

石井　　その中で真面目な話をするのはどういう時ですか？

O　　結構しましたよ。何先生と電車で横になった時、漢詩の質問をしたり、根津美術館で南宋の陶磁器の展示があって、X.M.さんと何先生が良く知っていたので、いろいろ教えてもらった。

Ms　　参加のきっかけは東大の HP のイベント欄を見て、いつも国際系のものはチェックしていたので、そこで見つけて、国際交流だし是非やりたいと思った。感想はとにかく楽しかった。あとすごく嬉しかったことが、国が違うから性格や見た目も違うのかと思っていたけれど、結構雰囲気は似ていたし、国以前に人間が持つやさしさが国境を越えてあるんだなと思えたことが自分の中での収穫で、自分が何かをしてあげたら必ず感謝を示してくれるし、渋谷へ行こうと誘ったら次の日からすごく仲良くなれて打ち解けたし、向こうの考えも聞けて良かった。

Tc　　私は 3 月に南京に行かせていただいた、その続きで今回も関わっているけれど、3 月に南京に行った時には南京大の人たちに本当によくもてなしてもらって、あの時にしてもらったから今回はそれに見合うくらいのおもてなしをしないとと思っていたけれど、私自身はキャンパスツアーくらいであまり関われなかったけれど、ボランテ

ィアの人たちがもてなしをしてくれたので、中国の人たちも満足して帰られたのではと嬉しく思っています。

石井　安心した?

Tc　満足されたらそれが何よりです。

■ 反省点その 1:スケジュール

Ks　反省点は、もう少しこちらが主導的に決めても良かったのではないかと思う。どういう授業を受けるかなどこちらからラインナップするなど。例えば日中の歴史に特化した授業を受けてもらうとか、コースに分けたラインナップをするなど考えられる。

O　あと、観光に彼らの比重があったというのも結構感じたので、もうちょっとがっちり縛っても良かったんじゃないかと思った。シンポジウムとかディスカッションを設けるなどしてもいいかと思った。土曜日に都内見学の時間がとってあるので、平日はもっと勉強してもらって、最後は観光をするというのも良いと思った。

Ms　確かに観光中心になっていて、月曜日と金曜日に討論会があったけれど、私にとっては時間が短いと感じた。もっと日常的に話す時間は観光をする時に沢山あるが、本当に真面目にディベートをする機会はあの 2 時間以外にももっと欲しかった。先生がたにも来ていただいて進行をしていただきながらもっとやりたかった。ただ、観光などにガンガン行っていたお陰で最終討論会の時に尖閣諸島の問題にも触れられたんだと思う。月曜日に来た時には本当に尖閣諸島の問題は出しちゃいけない雰囲気があったけれど、金曜の 5 限の時にやっとその話ができた。やはり段階を踏まないとこういう話はできないと思う。そう考えると遊びの中で関係を築いてからの、ディベートというのが大切かなと思った。1 週間の中でどうするかではなく、1 週間で仲良くなっておいて、2 週間目に毎日討論をするくらいのプログラムの方が良かったかなと思う。2 週間が厳しければ、あと 3,4 日は欲しかったと思う。確かに観光は反省する部分ではあるけれど一概に否定できないと思う。

△ 最終日懇親会にて

■ 言語の問題

Ks　来ている人達が日本語学科で交流はしやすかったが、日本語学科以外の人たちとも交流がしたかった。

石井　そうすると言葉の問題はどうしますか。

Ks　それなら共通語を英語にして、東大の授業も今後は英語で開講されるものが増えてくると思うので、そういう授業に参加してもらえれば良いのではないかと思う。

石井　日本語で話すより英語で話した方がいいのか、それとも、それぞれの良さがあるのか、日本語を使ったことについてはどう思いますか。

Ks　南大の人たちにとっては日本語を勉強できてよかったんだと思う。自分たちもホーム言語を使ってくれてラッキーだったが、よさといえば話しやすさだけだと思う。

石井　今度南京に行くときも日本語を使用することになります。日本語学科の学生さんが同時通訳をして、中心言語は日本語になる。向こうへ持って行った時も英語でやった方がいいのか、日本語で続けていくべきか、どう思いますか。

Ks　それなら英語でやりたいと思う。台湾との国際交流機構(UTK…)も共通語が英語だった。1 週間相互訪問をした。

Yt　僕は日本語だったけど。日台学生会議とは違うんですね。

石井　英語というのもひとつありますね。

O　僕はいつも交流に参加すると英語がメインで相手がアメリカ人などで自分が勉強するべき立場に立つことが多かったんですけど、今回初めて逆の立場になった。月曜日のディスカッションで、「ちょっと早くて分からない」と言われて、「もっと分かりやすく話さなければいけ

ない」と初めて感じた。それがとても新鮮な経験だった。日本語を学ぶ外国人と話す機会もこれからはわりとあると思うので、今回はすごい良い機会だった。

Ms　英語でやるのも良いが、自分が学生交流をするのが初めてだったのもあるし、折角日本に来てもらったんだから日本のことを細かく丁寧に伝えるというのは日本語の方がいいかなと思った。日本語もひとつの文化だと思うので、日本語に触れてほしいという面もあるし、そういう意味では英語のメリットもあるが、日本語のメリットもあると思う。

石井　Ms さんには伝えたいことがあったんですか。

Ms　もし彼らに日本に対する偏見みたいなものがあったら、それを直したいなと思っていました。反中感情があるんじゃないかと向こうが思っているんだったら……私の個人的な考えかも知れないけれど、人であるんだから国境は関係ないし、人間である限り一緒に仲良くしたいという気持ちが強いので、それを伝えたいし、それは口で言っても伝わらなくて、どれだけ相手に対して心を込めた対応をするかだと思うんですよ。自分が人を喜ばせることやもてなすことが好きな性格なので、それを如何に相手に伝えるというか、そういう部分で結局は口で言わなくても感じられると思うんですよね。そういうのを態度で伝えられたらいいなと思っていました。

石井　今回は伝わりましたか?

Ms　伝わったと思います。返ってくるメールを見ても自信があります。

Mt　僕は中国語選択なので、向こうが日本語も中国語も話せる人たちでとてもよかったと思った。中国語学習のモチベーションとしてはすごく良かった。

■ 反省点その 2:交流が狭い?

O　彼らが交流したのがボランティアのメンバーばかりだったので、自分がもしも彼らだったら、もっとほかの人たちと知り合いたいと思ったと思う。だからもう少しオープンにいろいろな人と知り合える機会を作れたら良かったなと思った。

石井　たとえばどんな機会が考えられますか。

O　たとえば彼らは日文選考なので、ここでも日文を専門にしているヤツらと一緒にシンポジウムとか……。

石井　日本の文学や歴史をやっているひとたちとのシンポジウムを企画して話し合えるようにするとか。

O　ええ。日によっては東大生の数が少なくなってしまった日もあったので、外部からもフリーに参加できるようにして楽しくやれても良かったかなと思いました。

石井　人数は制限してしまったので、逆にもっといた方が良かったかな。

O　人数多くしておいてシフトを作った方が良かったかなと思います。

Tc　教養学部後期課程を案内した日をつくりましたが、それはそういう意図もあったんですよ。文系から理系まで 6 学科のいろいろな人たちがいるから回ったんですけれど、でも時間が短かったのと、それぞれの学科の人たちもそれぞれの日常があって、その時間にいてもらうことも難しかった。教養学部を案内する場で幅広い人たちを紹介できたらいいのではと思いました。学生室に案内するのが得策かは分からないけれど、交流会を教養学部全体に開いて行うとかもできるかと思います。

O　さっき Ks さんが言っていたように、もっとテーマ決めて何かやるとか、継続的に取り組めるようにするのは僕も賛成でして、駒場の日常を体験するといのからは離れてしまうかも知れないが、テーマを決めて毎日ディスカッションするとか、1 週間の中で継続的に何かをやるのも良いと思う。

Ks　それで最後にファイナルプレゼンテーションをするとか。

石井　学生さんたちが事前にテーマを用意し 1 週間話し合った上で最後にプレゼンをするということですね。

■ 楽しかったこと

石井　さっきからみんな「楽しかった」と言っているけれど、どういう時に楽しいと思うんですか。

Ms　向こうが素を見せてきたときだと思う。腹を割って話してくれたり、明るい感じで話してくれた時かな。

Yt　ご飯を食べる時ですね。

石井　具体的ですねぇ。ご飯を食べる時が一番素になれる時なんですか?

O　中国人って 3 回一緒にごはんを食べれば親友になれるっていいますよね。

石井　確実に 3 回食べましたね。

会場　（笑）

Yt　やっぱり食材について話したり、金平ごぼうとか。そういう時が仲良くなれるきっかけだったと思います。

■ 反省点その3：準備不足

Tc　準備の期間を長くできたら良かったのではないかと思います。今回はバタバタ決まった感じではあったと思います。

石井　確かにもう少し早めにしても良かったですね。

Ms　顔合わせから最終打合せまでにあと3回くらい会う機会があっても良かったと思う。最初のレセプションの時、日本人同士でも「はじめまして」という感じだった。受け入れる側の雰囲気を来る人も感じると思うんですよ。

O　同じことを感じてまして、今回先生が先導して下さったところがあるけれど、もっと学生に任せてもらえれば、やりやすかったと思います。

Ms　投げるなら投げ切ってほしい。どっちなのかはっきりしてほしい。どこまでどうすればいいかが分からなかった。

石井　事前に準備をするとしたらどういう準備をすればいいと思いますか。

Yt　歓迎会でのダンス（笑）。

O　事務的にこの日にこうするとか、そういうことを学生の実行委員にさせるとか。

Ms　ML をつくるとか。

Ks　パンフレットを作るとか（持参した台湾との交流パンフレットを見せる。地図や写真とプロフィール入り）。事前に情報を送ったら本になっていました。しっかりしたものじゃなくてもいろいろ作れると思う。

石井　BBS 上で済ませてしまおうと思っていたのですが……。

Ms　BBS へはめっちゃ投稿し辛かったです。

O　学生はこういうの作れと言われれば作りますので。

石井　確かにそうやって盛り上げていった方がいいかも知れませんね。

Tc　学生同士でもっと前からやっておけばという話ですけれど、3 月に南京大に行った人たちにも言えると思うんですが、南京大へ行ってから 3 日くらいしてようやくお互いが分かってきて、交流するにも事前に連絡を取り合って集まる場があればよかったと思います。

I　それは Tc さんが一人部屋で、話し合えなかったからじゃないですか？　同じ部屋に宿泊したらすぐ分かりますよ。

Tc　I さんは同じ部屋の S さんのことは分かっても他の人は分からないでしょ。

W　前の座談会の時に、あらかじめ南京と中継できるからワーキンググループを作って課題をやってあらかじめはなし合いなどをした上で、向こうへ行った方がいいとリクエストしたんですけれど。

石井　そういうのってこっちからやって下さいと言えるものなのかが分からないのですが。

W　たとえば清水先生の事前課題が出ていたと思うんですけれど、身体論の授業で南京へ行ったら、東大の学生の中でプレゼンをしてもらうので、話し合っておいて下さいと言っておけば、課題の出し方次第で事前の交流はできると思う。

I　でもそれって、僕たち課題さえもやってなかったですよね。

Tc　何かをするというのではなくても、集まってカジュアルに話し合ってもいいと思う。

W　逆に言えば、来年からは新規のメンバーが参入するので、新しいメンバーに対して、去年のメンバーが説明できるので、そういう場を設けてもいい。あとは今回のボランティアが 2、3 人行くのであれば、その人たちがコアになってくれれば飲み会でもいいからやってくれればいいかなと思います。

Mt　ぼくはそもそも参加のきっかけが、こういう交流に参加したことがなかったので、Hh 君に誘われて軽い気持ちでここへ来て、最初は友達いなくて困ったけれど……（笑）だからそもそも中国人と仲良くなる前に日本人のメンバーと前もって仲良くなる機会を作るのは大賛成。来年も行く前に知り合いたい。

石井　活動の内容についてはどうですか？

Mt　ぼくは授業のエスコート以外は飲み会と都内見学以外参加できなくて、でも、お互いの国に対する偏見というかこちらのことを悪く思っているんじゃないのかという懸念というかそういうものがなくなって、それだけでも

この交流に来た価値があったと思います。

石井　そういう懸念があるのになぜ参加したんですか?

Mt　やっぱりなんだかんだ言って話してみたかったし、お互いの国についてどう思っているのか知りたかったし、自分の学んだ中国語が本当に通じるのか試したかった。

■ 反省点その 4：議論の少なさ

I　どうしても前の南京大学と比べると、議論が少ないですよね。議論の中で先輩に分からないところをカバーしてもらったり、より深い理解やレベルの高い議論が前回はできた。でも今回は授業に関する議論がなかったから、右から入って左から抜けていくというか「難しかった」だけで終わってはあまり意味がないんじゃないか、交流とか観光ばかり覚えていて授業について覚えていないのは、それでいいんだろうかと思った。

Mt　13 回の中の 1 回の授業に出ただけで議論するのは難しい。

Yt　1 回制の講義に出てもらうとか。

I　南京でやった時みたいに特設講義をするとか。

石井　でも特設講義では実際の大学の状況が分からないという意見が、南京から出てきたので。

Ms　いままでの授業内容を予習みたいに伝えといてから来てもらっても良かったんじゃないか。日本人でも 1 回だけでは分からない。今までの内容の要約を出して説明しても良かったんじゃないか。

石井　例えばそれを学生さんに頼んでノートをまとめてやってもらうのは負担じゃないですか?

Ms　ノートをまとめればいいだけだし、学生のためになるからできると思う。

W　東大のやってる授業に対して学生が入ってくるのは意味のある企画だと思った。でもそれを 1 週間やって意味があるかという問題だと思う。今回「いまいちこれができなかった」という意見が多かった。南京ではいつも一緒だったけれど、この企画では授業がバラバラだから学生交流にムラができてしまう。それに共有できるサブジェクトがないから話し合いがしにくい。観光の中でも話し合うことができない。南京ではいつも一緒にいることでいろいろな議論ができた。問題は学生がバラけないので、教室に入ってきてもお客さんとして扱われてしまう。ただ単に教室に入ればいいというものではない。

I　ちょっとだけ特設講義を設けるとか。福島先生の模擬体験はよかった。

石井　前半に特設講義を設けて、後半に体験授業に出てもらうというのもできるかも知れない。

O　体験ならば 1 週間特設講義に出てもらって、金曜日 1 日 1 限から 5 限まで授業に出てもらうのもいい。

Ms　もともと 1 限から 5 限まで詰めているのかと思った。でもすかすかだったので、驚いた。

I　最後を詰めると勉強したという感じになりますもんね。

石井　こちらとしては、議論の機会を増やそうとか、中間にもう 1 回議論を入れるとか考えていたけれど、それより特設講義の方がいいですか?

W　というのも、多分集まって議論して下さいと言うと、雑談レベルのことは言えない。つまり今回の日中関係についても、中国文化の授業や国際関係の授業に混ざって、あのテーマを話せば、ある程度アカデミックな知識があるから如何に議論をするかが分かったと思う。そういうのなしで、話して下さいと言うと、個人のバックグラウンドを話すしかないし、そこで終わってしまう。それはそれで価値があるが、大学でやる必要性はない。もっと議論を深化させる必要があって、その仕掛けを授業に組み込むとすれば、特設講義と議論をサンドイッチにして、2 日に 1 回くらい入れていけば、もっと週密度があがりますよ

△ 最終討論会にて

ね。

石井　議論のし方なんですけれど、最終討論は話す順序を指定することで議論がしやすくなると思ってやったけれど、特に南京の人たちは議論に慣れていないのではないかと思ったのですが、どうでしょうか。

U　南京大学の学生は最終討論では 1 週間の感想を発表すると思っていた。でも急にテーマを与えられたので多分誤解があった。

石井　もうちょっと突っ込んだ議論や内容を学問的レベルに高めるということは私たちも考えたのですが、具体的にどういう方法を選べばよかったんでしょうね。

Ms　特設講義をするのは一つの手だと思う。あとは向こうから来る時に 1 週間を通して考えるテーマを事前に与えてそれを毎日あれこれ考えながら最終討論会で発表するのも良い。事前に何か準備をしておく必要がある。

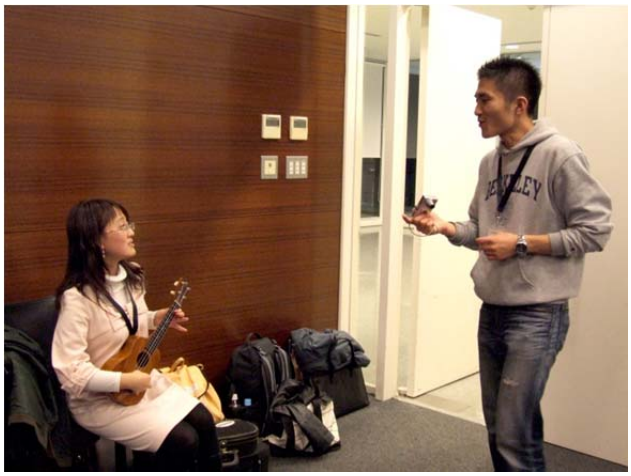
石井　今回も初日の討論でテーマを出したかったのですが、やはり今回の形態では出すのが難しかった。

Yt　初日というのはやはり難しいですね。

■ 反省点その 5：中国人がバラけなかった

W　今回学生が集まる場所がなかった。やる気があって時間のある学生が一緒にしゃべれる場所があると良かった。義務ではないが毎日集まって何かを行う場所が欲しかった。日本人同士も、中国人と日本人も混ざる場所になると思う。

O　全員でアクティビティをする場所が欲しいということでしょうか？



△ レセプションにて

W　前回と比べると問題は中国人がバラけなかったことだと思う。理想的には中国人 1 人、日本人 1 人くらいのレベルでぐるぐる混ざるということだと思う。今回は中国人がまとまっている周りに日本人が取り囲んでいる感じだった。苦しい要望ばかりで恐縮ですけど。

石井　いえいえ、でも前回の南京ではバラける状況が起こったんですね？

W　一緒の時もあったけれどわりとバラバラで行動することもあった。

I　でも W さんがいないところでは結構バラけてた。

Ys　あの 3 人と院生 2 人と Z.Y.と……。

I　あの 2 人分けるのは無理だよね。

会場　（笑）

O　でもやっぱり自分も中国人をバラけさせたいと思っていたので、それは必要だと思う。

■ 授業推薦について

石井　今回の特徴としては、授業を皆に推薦してもらって案内してもらうのは、特徴ではあったんだけれども、こういうプロジェクトではこの方針はうまくいかないということでしょうか。

Yt　いえいえ、推薦したい授業はあったんだけれども、どうしてもネット上での推薦だったので、そこでもっと事前の議論があって詳細を調べてから各自授業を選択してもらえれば良かった。

W　理想的なサジェスチョンですが、集中講義を東大で行い、東大の学生には単位を与え、南京大学もそれに参加する。そうすれば、南京大学の学生のための授業じゃないし、わけのわからないコンテキストに放り込んで 1 回だけの体験にもならない。

石井　南京集中講義の逆バージョンを東大でもやるということですね。

O　自分自身もその場で完結する授業に参加する方が得られるものが多いかなと思いますね。

石井　反省点が多くて頭を抱えていますが……議論を深めるということはこちらもしてほしかったし、皆もしたかったということですよね。

■ 今後への要望

石井　最後に、聞きたいのですが、個人的にもっと何

を得たかったかという要望があれば出して下さい。或いはそれは得られたか得られなかったかも含めて出して下さい。

Ys　小さい頃から日本と中国の間で生きてきた身としては日中関係の問題をもっと話したかった。答えは出なくてもぶつかってみなければ、分からない。日本と中国はどう付き合っていくかはすごい大雑把な質問だった。もっと何かに絞ってその問題に関して皆さんはどう思うかというやり方にした方が良かった。あと観光はもっとあった方が良かった。

Tc　そもそも、U さんによると今回の人たちは遊びが主な目的だった。向こうのニーズがそうであれば、それに応えたいという Ys くんの気持ちなのかなと思った。

会場　（笑）

石井　Ys くんはどうして観光がもっと欲しいと思ったの?

Ys　どんな方法で旅行しに来たとしても、ただの旅行で終わる。僕は中国に行くと親戚の家に泊るから、普通の旅行とは全く違う体験ができる。だから、日本の学生と行動することによって、普通の旅行では見られないものが見られると思うし、日本の文化に興味を持っている人たちだから、それは座学では限界がある。だから日常に飛びこめる機会がもっとあっても良かったと思った。だから観光は削らないでほしい。

Yt　効率化はできるけれど……。

Ys　いろんな意見が出ましたけれど、そういう意見を事前にやっておけばよかったかなと思います。

石井　でも初めてだったので、どこまでどうしたらいいかは分からなかったというのが本音ではあります。じゃ、Yt くん。

Yt　もっと掘り下げても良かったのは、彼らは日本文学に対する関心が強かった。そういうのを事前に聞いておいて、僕は C.J.さんと太宰治について話したのが面白かったので、1 日目に本屋に行って文献を探したりした。専攻を聞いておいて、それに対して用意しても良かった。向こうの情報が事前に欲しかった。

W　2 人の話を聞くと、我々は観光か授業かの二項対立で考えがちだけれども、どっかで学術的な要素があって、例えば三四朗池を見せるとかというのがあってもいいと思う。

石井　それは難しくない?

Yt　簡単だと思う。東大生も知的関心が高いから、遊びに行く場もそれなりに面白いところになると思う。

Ys　先に議論の場を設けた方が良かったんじゃないでしょうか。さっきから皆すごいなぁと思っています……。

石井　日本の学生さんたちの間でも話し合うのは面白いですよね。

Ys　そう思います。

W　未来が決まっていない中でもがくのはいいよね。

Ys　皆すごい勉強されているので関心しました。

石井　Yt くん自身が求めるものはなかったですか?

Yt　僕は満たされました。ほんとに充実していました。

U　こういうのはただの観光ではなくて、同時に交流がある。やはり授業でできない交流も観光ならできる。授業と観光の時間を別々に設けて、授業を受けてから交流会を行って、観光の時に日本人の学生と軽い話しができると思います。歴史の問題で南京へ来る日本人はすごく少ない。南京で日本語を勉強する学生は日本人と交流する機会をとても大切にしています。中国人の学生の日本人に対する偏見は、日本語学科の学生も持っていないわけではない。でも日本人に対する抵抗がない。そして日本人の学生が南京へ行って交流を行うと聞けば、南京見学の形で行う。東京大学だけではなく、他の日本の学生にも南京を案内する中で日本語を学び交流する。交流の形はやはり観光のような形でやっている。授業でできる交流は欠けている気がする。

Ks　私が求めていたものは交流なので満たされました。ただ、もっとできることはいろいろあったと思う。ボランティアという立場に甘んじて自分の予定を優先させてしまったことが反省です。もしも、特設講義があって 1 つの問題に取り組むのであればもっと関われたと思う。もっと貢献ができたのではないかと思う。自分の推薦する授業以外は行かなくてもいいかと思ってしまったので……そもそももっと東大側が一致団結して準備にあたり、責任を割り振ればもっとうまくいったかも知れない。もともと

準備に関わっていれば責任も感じたと思う。

O　他の学生交流に参加すると、そういう感覚を持つと思う。

Ks　ボランティアよりスタッフとした方がいい。実行委員とか。

O　求めていたものは、中国人と知り合い議論をすること、それはもう少しできたなと思った。それを解決するために、特設講義を出てディスカッションの時間を増やすなどあるかと思う。もうひとつ、東大生も自腹で払ってもいいからホテルに一緒の部屋に泊っても良かった。

Yt　ホームステイでも良かった。

Ms　私の母は「うちに来るの?」と言ってました。

Yt　和館で一晩とかもいい。

O　24 時間体制でやるのもいい。願わくば人数がもう少し多い方がいい。来る人で男が 3 人しかいないのが少ないなと思った。

石井　得られたものは?

O　ものすごい沢山あった。議論はある程度の信頼関係ができれば自分でやっていけるので、それを築けたのがよかった。

Ms　私は仲良くなることをしたかったので、達成できた。でもそのレベルが深くなかった。深い突っ込んだ議論がしたかった。議論の場をもう少し設けてもらいたかった。仲良くなるのが先だから、それから深い議論ができるので、期間が短かったと思う。あとは、こちらが提供することばかりだったけれど、向こうからの提供が少し少なかった。向こうの学生が来たときに自己紹介にとどまってしまい、もしできれば、彼らに何かプレゼンをしてもらいたかった。相互の交流として、こちらが与えてばかりだと、さらに提供するには向こうからも提供してもらう必要がある。南京大学で勉強していることをまとめて発表してもらうとか。

W　前回の座談会の時に、何かやってもらおうという話は出ていた。中国語会話でもいいから。

石井　Ms さんが言うのは、この 1 週間で勉強したことに関するプレゼンではなくて、南京に関するプレゼンですか?

Ms　そうです。どちらもあると思うけれど、南京でこれまで何を勉強してきたのかなどのプレゼンをしてもらえると良かった。こちらだって、授業に連れて行ったりいろいろ話したりしているのですから、向こうのこともっと知りたいと思います。

O　昔参加した国際会議で両方の国の学生がそれぞれプレゼンをしたことがあります。その時のテーマは「あなたの大学のある都市の都市開発について」でした。同じように 1 つのテーマについて話し合っても面白いと思う。

石井　確かに南京という街は歴史があるので、それを紹介してもらうのは面白いかもしれない。

Ks　私が参加したのは「大学の国際化とか、大学での英語教育について」というテーマだったけれど、その時は、英語学校の状況や予備校の状況について紹介があった。

Tc　このプログラムに求めることは、向こうのニーズを探るということが事前にできていたら良かったと思う。授業を紹介する時にどういう授業を紹介するかを考えるために、向こうの人たちがどういう授業に出たいかを知ることができればよかった。授業でなくても行ってみたいところとか。向こうのニーズを探ることをもう少ししてもらいたかった。それを言うなら自分がすべきかも知れないけれど、決まることが結構バタバタ決まっていったので、もう少し事前に準備ができればよかった。

石井　できることとできないことがあって、こちら側が連絡をしても中国のトップから実際に動く人たちまで連絡が届くまでに時間がかかるというのが実情。逆に学生同士であれば、直接に連絡を取ることができるので、そこは学生さん同士で積極的にやってもらいたいと思っている。

Tc　BBS を用意してもらっても、PW を教えられたのが直前だというのは困る。

石井　それも同じ状況で、PW は早く送っているが、南京側で伝えられるまでには時間がかかってしまう。

Tc　でも究極の目的は学生の成長ならば、学生の便宜を考えることが大事だと思う。

Ks　私はニーズを考える必要はないと思う。こちらが枠を決めてどーんとやってしまえばいい。それが普通じゃないか。

Tc　何でも聞く必要はないが大まかにでも情報があれば有り難い。歴史のあるプロジェクトならば 1 回 1 回

話しあわなくてもできるけれど。これは初めてなので、もう少し連絡をスムーズにしてほしい。あと、自分の反省点でキャンパスツアーでもう少し時間があればよかった。

石井　有難うございます。その点はもう少しうまくできるようになるよう努力したいと思います。

W　今回一番得たものは、運営側の石井さんと大学院のSさんに対する感謝の念です。というのは、本当に申し訳なかったのですが、論文を書いていて時間がなく、今まで担当していた自分の役割を石井さんと S さんに投げてしまった。すごく難しいと思う。いろいろなバックグラウンドを持っている学生がいるのでそれぞれできる範囲がある。もともとの想定は、3 月に行った学生がコアになって企画を組んで、それにボランティアを加えてやろうとしていたんだけれど、3 月に参加したメンバーが忙しくて動けなかった。ある程度密度を濃くコミットする人と、それほどではない人と、仕事の濃淡や役職の振り分けをもう少しうまく付けた方がいい。なかなかうまく動かなかったので、なるべくうまく話しの火ぶたを切ろうとした石井さんのメールとか S さんの発議について、学生交流の主体は学生なので、学部生がやろうとするところに、先生たちがワーッと入ってしまってはまずい訳だし、何もやらなければ始まらない訳だし、先生たちが苦労していたと思う。あとは、問題点ばかりが出ているので、今回の良かった点を挙げるならば、インターネットだと思う。メーリングリストだとまずい。沢山情報が回るし、確認が必要なので、BBS を使って話をまとめようとしたのは良かったと思う。あとは、春に南京へ行って、行って帰って終わりかというと、それで終わりにならなくて良かった。今だに 1 週間にいっぺんメールをしているので、今後の研究のためにも良かったと思う。1 回で終わりではなくて、もう一度できたことは良かった。これを長期的なスパンでやっていけばよりうまくいくと思う。

△ レセプションにて

石井　確かに続けていきたいと思っており、それには学生さんたちに期待するところが大きいです。もともとのプランとしては 3 月の参加者が長期的な計画を立て、新しいメンバーはリフレッシュもさせつつ、前の人たちのやり方を見て、次の主体的メンバーになってほしいと思っていました。でも今回は学生さんたちに主体的に組織を作ってやってもらうのはなかなか難しいというのが率直な感想ですね。もし今後やっていくとしたら今回参加してくれた皆さんと前回の皆さんと合わせて、何らかの継続的な組織を作ってくれると、今度は 3 月に南京へ行くし、来年のこの時期また来るので、そういうことができると交流としても深まると思います。

O　3 月は選抜があるからいけるかどうか分からないけれど、11 月はまたここに絶対来ていると思う。

W　あとは院生のコミットをどうするかということがある。最初院生があまり顔を出さない方がいいというのがあった。あまり院生がトップダウンにやると学部生が受動的になってしまう。どうしようか悩んだ。結局博士課程のSさんに音頭を取ってもらったらうまくいった。院生がどう入るべきかは難しい。

全員　院生とか何とかは別に関係ない。

石井　最初は W さんと、S くんと私の間で全部決まってしまったので、できれば皆を巻き込んだ活動にしてもらいたいと思っていた。例えば Ys くんがさっき先輩がいて良かったと言っていたけれど……。

I　院生がいた方がいいですよ。3 月の南京では院生が入ってくれたので、ただの無駄話ではなくて知的な好奇心が生まれた。院生が、学者肌の人間が 1 人入るとやっぱり全然違う。知的な会話になる。南京ではそうでしたよねぇ。

W　あの時は院生と学部生が 1 対 1 で入ってたからね。

石井　逆に今回はもっと院生に参加してほしかったと思う。

△ レセプションにて

W　難しいところで、院生って生活のリズムが違う。例えば学生が分からないと教えてもらえる。自分のバックグラウンドを還元する形で参加してくれた。でも院生は家に帰ったら論文書かなきゃいけないし、逆にいえば学部生と同じようにやってくれというのは院生に酷だと思いますね。院生が参加してもいいような、自分の研究とのコネクトがあるとか、参加していて院生が輝ける場を作ってあげるとか。院生が参与する環境を作るにはある程度の時間を犠牲にしてもいいような条件を作る必要があるのでは。最初は院生の研究発表をしようと提案がありましたが。石井さんから見て院生はうまく混ざれていましたか?

石井　もう少しうまく混ざればいいなと思いました。混ざれないのはもったいないと思っていましたね。今回の趣旨としても院生と学部生を混ぜたいと考えていた。南大にも院生を参加させてくれるよう依頼していた。

W　例えば院生は院生と交流して学部生は学部生で交流するとか。そのように分けてもいいかもしれない。混ざるのはよさでもあるけれど、他方で中身を詰めていく必要もある。

石井　院生だけの交流をするのは難しいとは思うけれど、院生が発表をして学部生がそれを聞くというような場所を作るのは可能だと思う。院生の人たちの発表って、でも聞いてみたいよね。

会場　聞いてみたい。

W　院生をフィッシングするなら、極端なこと言えば、学生交流では真面目な人は来ない。

石井　あともうひとつ、理系の院生も入ってもらいたい。それは廣瀬先生にも話したことはあるけれど、先生の紹介としてならあり得るかも知れない。

W　3 月の南京では学生同士の話し合いが多かったけれど、学生と先生との交流があっても良かったと思う。

Mt　僕の参加は打算的で 3 月に南京へ行きたいので、今から参加しておこうと思って参加しました。それでもう少しやりたかったことは、折角向こうが日本の文化を研究しているんだから、中国で日本の文化を学んでいる人と話をしたかった。W.C.さんとはちょっと話をした外国の視点から日本文学をどう見るか。そういうことをもっと話したかった。できれば全員とそれぞれの興味のある分野であるから日本をどう見ているか聞きたかった。

Ys　1 対 1 でやるから分かることもある。

I　だいたい皆似たようなものなので、ここまで来ると辛いところがある。もう言いようがない。ただ、ひとつだけ思ったのは、ML を回しすぎ。個人の返事は ML で回さない方がいい。

石井　でもあれのおかげでうまく回ったというのもあると思う。

Ys　ML はよかったよね。

石井　とても沢山課題をもらいましたので、これについて考えたいと思うし、こういう交流って中国に留学しても留学生宿舎に放り込まれて、現地にいてもなかなか話しあえないという事情がある。だからこうやって話しあえることは貴重な機会だと思う。そしてこれからは、皆さんにもいろいろ相談して協力してもらうことも出てくると思いますので、どうか宜しくお願いします。

リベラルアーツ沿革

2001 年～2010 年

2001	南京大が中日文化研究中心を設置、蓮實重彦・前東大総長が名誉創設者に就任。
2002	南京大創立 100 周年式典で、佐々木毅・東大総長がアジアの大学を代表して講演。
2004	東京大が教養教育フォーラムを南京大で開催、海外拠点「東京大学リベラルアーツ南京交流中心」を設置。
2005	EALAI プログラムスタート。古田元夫・副学長、木畑洋一・教養学部長、南京市教育フォーラムに参加。
2006	表象文化論・集中講義を南京大で開講。「能楽ワークショップ」（観世流・関根祥六、祥人）を開催。
2007	表象文化論・集中講義、南京大の単位認定の正式科目となる。
2008	表象文化論・集中講義、インターネットによる講義中継を実験。小島憲道・教養学部長の講演会を開催。
2009	LAP プログラムスタート。表象文化論・集中講義、インターネットを使った予習システムを導入。 「坂東玉三郎講演会」を開催。山影進・教養学部長の講演会を南京大の仙林新キャンパスで開催。
2010	身体論・集中講義。プレ講演を南京大へインターネット中継。 東京大学学生 10 名が南京大学集中講義に参加、学生討論及び交流を実施。

協力者一覧

■ 執行委員長 Chief of Executive Committee

刈間 文俊 KARIMA Fumitoshi

■ LAP 特任講師 LAP Project Assistant Professor

石井 弓 ISHII Yumi

■ LAP 特任研究員 LAP Project Researcher

赤木 夏子 AKAGI Natsuko

■ 報告集編集 Editor

赤木 夏子 AKAGI Natsuko

■ 協力 Cooperation

浜口 一恵 HAMAGUCHI Kazue

岩田 以都子 IWATA Itsuko

2011 年 3 月発行

東京大学リベラルアーツ・プログラム（南京）

東京都目黒区駒場 3-8-1 東京大学駒場キャンパス 9 号館 301 〒153-8902

(03)5465-7671

admin@lap.c.u-tokyo.ac.jp

http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/